

〔解義〕 凡そ物壯則衰。兵を以て強く威を奮ふは、所謂壯なるものにて、これを不道と云、不道は速に消え亡ぶ、たゞ謙虚柔弱なるは、これ長久の道なり。

三十一章

〔章意〕 この章前章を連ねて兵を云、その言多からず、然れども遂に兵家の祖となる、唐の王眞の如き、老子の書は、兵學の爲に作れりと云者あるに至る。

夫佳兵者不祥之器物或惡之。故有道者不處。

〔字訓〕 或とは易の或承之羞の或の如し、誰となくと云の意なり、之器二字衍文なり、一本に此二字なし。

〔解義〕 それ兵は人を殺すことなり、これを喜む者は、不祥の人なり、その心残忍、天下の人みなこれをにくむ、故に道を心得たるものは、兵を喜むことをせざるなり。

君子居則貴左。用兵則貴右。

〔解義〕 君子常に左を上とす、左は陽なり、兵を用ゐるときは右を上とす、右は陰なり、これ凶禮を用ゐるなり。

兵者不祥之器。非君子之器。不得已而用之。恬淡爲上。勝而不美。而美之者。是樂殺人者。則不可以得志於天下矣。

〔字訓〕 恬はしづか、淡はさつぱりとしたるなり。

〔解義〕 兵は不祥の器、君子の用ゐることを樂むものに非ず、もし不得已して兵を用ゐるときは、恬淡なるを上ぶ、勝と雖も美とせず、然るにそれを美とする者は、これ人を殺すことを樂むなり、それを殺すことを樂むものは、天下の人のにくむ所なり、天下を靡け一統せしめ志を得ることはならざるなり、

吉事尙左。凶事尙右。偏將軍居左。上將軍居右。言以喪禮處之。殺人之衆。以哀悲泣之。戰勝。以喪禮處之。此一節もと本文に入せるなり、

〔字訓〕 偏將軍は副將なり、喪禮は凶禮なり、

〔解義〕 吉事尙左、左は陽なり、凶事尙右、右は陰なり、副將居左、大將居右は、これ凶禮を以て處置するなり、人を殺すこと多ければ、

ば、哀み悲みて泣き、戦ひ勝てば、凶禮を以て處置するなり、古は兵は凶門より出すも、この故なり、

三十一章

〔章意〕 この章二段に分け、前段は君上は樸の如くなるべきを説き、後段は天下の者に知止しむべきを説く、

道常無名。

〔解義〕 凡そ方なるものは方と名づけ、圓なるものは圓と名づく、形あれば名あるものなり、只道は形なく無なるものなり、故に常無名なり、人この道を心得て、亦一偏の形なく、名づくべきなき人となるべきなり、

樸ドモ雖カスガ小ナレ天下莫能臣トスル也。

〔字訓〕 樸は山より伐り出したるまゝにて、いまだ削りて圓なる柱方なる柱に木どりをせざるあら木なり、それを假り用ゐて人の天性にたとへ云なり、臣は孟子に所謂の役の字の意に近し、侯王を臣とするものなし、こゝは假り用ゐて、役ふこと自由にすることを云なり、髡參軍、短主簿、能令公喜、能使公怒は、これ桓温を自由にするると云ものなり、小は一偏の形なき故、かすかと云なり、

〔解義〕 柱は方圓長短の形あり、樸はあら木方圓長短の定れる形なし、人に在てこれを云へば、天君泰然子の四字註に出として、剛柔好惡、一偏の形を顯さざるを樸と云、凡そ人は、智者は能を以て役

ひ、仁者は惠を以て役ひ、勇者は武を以て役ふべくして、皆それそれ一偏のすぢにて自由にすることを得べし、只この樸を守る人のみは、小なれども外より手つけられず、天下に於てこれを自由にするものなし、

侯王若能守之。萬物將自賓。

〔字訓〕 賓は客なり、歸服し來るを云なり、

〔解義〕 侯王もし能くこの樸の道を守り、剛柔好惡、一偏の形を顯し玉ふことなく、剛とも柔とも、好とも惡とも、外よりその心臆を窺ひ測ることならざるときは、天下の者おのづから歸服して、賓の如く來るべし、以上本文問て曰、侯王樸を守るも、天下の賓服するには至るまじ、對て曰、文人は武人と親しからず、茶人

は弓師と懇意ならず、すべて一偏の形を顯すものは、親しむものあり、親しまざるものあり、侯王もし一偏の形を顯し、弓を好み玉へば、射手のみ集りて、餘藝の者は遠ざかり、茶を好み玉へば、茶人のみ集りて、餘藝の者は遠ざかる、故に一偏の形を顯せば、天下に於て賓服するものもあり、賓服せざるものもあるべし、只剛柔好惡の形顯れざる時は、文人、武人、茶人、歌人、猫も杓子も、時に不逢とて、うらみ語きて隅に向て泣くものなく、皆親しみて歸服すべし、これ樸を守れば天下賓服する所以なり、

天地相合、以降甘露。民莫之令、而自均。

〔解義〕 天地の氣和合すれば、祥瑞なる甘露降る、侯王もし能く樸を守り玉へば、天下の賓服すること亦如此なり、嚴しく號令

制止することなければ、天下おのづから平均に治まるなり、これを無爲の治と云なり、

始制有名。

〔解義〕 それ無爲の治と稱するも、物の分ち事の理なきにあらす、山より伐り出せるなら木、これを伐り削り、楹となり、楸となり、棟となり、梁となる、天下萬民も、その天性いろくくに分れて、士となり、農となり、工となり、商となる、千差萬別なり、於是侯王これを治め玉ふには、始て官長を制して司とらしめ、士農工商の名目を立て、分限をきめ、尊卑を定め玉ふなり、

名亦既有、夫亦將知止。知止所以不殆。

〔解義〕 士農工商の名目ありて、尊卑の差別すでにあれば、卑きものは尊くならんことを欲して相争ひ、必危きに至る、以上本文の前一層故に士農工商の名目すでにあれば、その上には天下の人々、尊きも卑きも、各その分限に安んじて、欲に動くことなく、止まると云ことを知らしむるなり、人として知、止て欲に動くことなきは、不殆安泰なる所以なり、

譬^レ道之在^ニ天下。猶^ニ川谷之於^ニ江海也。

〔解義〕 道を得たる人の天下に在るを譬ふれば、細き川々谷々の水の、おのづから大河大海に赴く如く、不召不招して、おのづから賓服歸嚮すべきなり、

三十三章

〔章意〕 此章主意、末の一節にあり、死生幽明の理、一言云盡す、

知^ル人者、智^ハ自知者明。

〔字訓〕 明とは心に蔽なく明かなるなり、

〔解義〕 俱、曰、予、聖、誰、知、鳥、之、雌、雄、人、み、な、俱、に、聖、人、の、如、き、貌、を、し、て、鳥、の、同、じ、く、黒、く、し、て、雌、と、雄、と、分、ち、が、た、き、が、如、く、そ、の、賢、否、の、見、分、け、が、た、き、も、の、な、れ、ど、も、そ、の、人、の、賢、否、を、見、分、け、る、ま、で、は、智、と、云、べ、き、の、み、に、し、て、い、ま、だ、至、れ、り、と、す、る、に、足、ら、ず、以上知人者智をと、く、人、皆、曰、予、智、吾、愚、な、り、と、知、る、も、の、な、し、然、る、を、吾、賢、否、を、辨、へ、知、る、も、の、は、心、に、く、も、り、な、く、明、か、な、る、者、に、て、こ、れ、知、人、の、智

よりも一等すぐれたる者なり、以上自知者明の一句をとく

勝人者有力。自勝者強。

〔解義〕 人みな人に勝つことを好めども、人に勝つは有力と云べきのみにて、いまだ至れりとするに足らず、以上勝人者有力をもそも勝ちがたきものは、己の欲なり、欲は己が身より生ず、耳あれば美聲を聞くことを欲し、目あれば美色を見ることを欲し、身體あれば富貴安逸ならんことを欲し、身ある限りは欲のあるべき理なり、然るを吾耳目身體の欲に勝ち、聲に迷はず、色に惑はず、富貴に誘はるゝことなく、すべて外物に悩まざるゝことなきは、強哉矯と云べし、これ有力と云者よりは、又一等すぐれたる者なり、以上自勝者強の一句をとく

知足者富。

〔解義〕 知足て足れりとし、望を立つることなくして、今有るなりを失はず、長く保ち得る者は、富めりと云ものなり、以上本文欠光武帝の語、その上を望むとを云、世界李仇の語、適有一復少一大は、世の常なるを辨へず、得隴望蜀、後漢て、今有るなりまでを失ふは、不知足の過ちなり、

強行者有志。明強一韻、富久壽一韻、この志字、古必韻叶ふべし、今考ふべからず。

〔解義〕 身體精力の倦み疲れて怠り懈るは、これ氣の衰へたるなり、然るに強めはげみて行ふ者は、これ志にて氣を引立つるなり、有志ものと云べし、

不失其所者久。

〔字訓〕

不失其所とは、その相當の場に居るを云なり、

〔解義〕

抱關擊柝の任に勝へたるものは、抱關擊柝となり、卿大

夫の任に勝へたるものは、卿大夫となり、其場所を不失、相當の所に居れば、必安泰にして長久なり、以上本文易に云、負且乘、致寇至。下賤なるべきもの、僥倖にて高き位に在るときは、外よりその不相當なるをにくみ、打ち落すもの出で來り、長く保つことはなりがたし、

死而不亡者壽。

〔字訓〕

此句極めて難解、今姑く陸師農の説に従て解す、老子の

意に當るや否やを知らず、死は身の死するなり、不亡とは吾眞性の不消を云なり、莊子に所謂我と云もの、佛家に所謂魂魄なり、

〔解義〕

それ身死して我真性も同じく消え亡ぶると思ふとき

は、たとひ千載長生すとも、千載の後には消え亡び、短折に異なることなし、以上本文の前一層、以下本文を説もしよく懸解二字莊子に出て、今吾この身は、吾と云ものならず、こは天地よりの借物にて、一生百年の間、吾眞性を寓せおくまでの逆旅なり、たとひこの身は死するとも、空蟬こゝろの蛻かなり、蛻はもとの處に枯槁こるれども、蟬は亡びず、はやくも他の木に移りて、美しき聲を發す、吾身は亡ぶるときあれども、吾眞性は消えもせず、亡びもせず、靈々昭々、千世萬世盡くることなしと心得たる者、これを壽ナゲキと云ものなる、

三十四章

〔章意〕 此章は、聖人道を身に體し、能小能大なるを云、

大道汎兮其可左右。

〔字訓〕 汎はひろしと訓ずれども、ばつと廣き意なり、浮草や今日フは向ふの岸にさく、この意に近し、

〔解義〕 それ大道は汎兮して、左にも右にも用うべし、

萬物恃之而生而不辭。功成不名有。

〔解義〕 草木の萌え出づるも、道モの力なり、蓂蓄ツボミを催すも、道モの力なり、萬物みなこの道モを待みにして生ずれども、道はかれこれ

さしづせざるなり、花の開くも、道モの力なり、實ミのなるも、道モの力なり、萬物功成れども、道は我高名として、その場にをることはせざるなり、

衣養萬物。而不爲主。常無欲。可名於小。萬物歸焉。而不爲主。可名爲大。

〔字訓〕 衣は衣キするなり、養は食はしむなり、衣養はそだてあげることにて、萬物を成就するを云なり、主は主宰なり、

〔解義〕 人は萬物を化育するの功あれば、その主宰となる、帝と稱し王と稱するものこれなり、以上本文、前一層、たゞ道は萬物を衣養ソグ仕シ上アぐるの功あれども、その主宰カシラとならずして寂然シヤクゼンたり、以上衣養、萬物而不爲主、災なれば、水は火を消すの用なきもの、如く、病なけれ

ば、薬は病を愈すの用なきものゝ如し、天下の人無欲ときは、道は欲を濟すの用なきものゝ如く見えて、有か無かの如くなり、これ道は名づけて小なるものと云べし、以上常無欲可、名於小とく、人は萬物歸すれば、その主宰となる、帝と云王と云ものこれなり、以上本文の前一層、たゞ道は萬物歸してその力を蒙れども、その主宰とならずして漠然たり、以上萬物歸焉而、不爲主とく、その功用の廣遠なる、名づけて大なるものと云べし、以上可名爲、大とく、小にして小にあらず、大にして大にあらず、これ道の妙なる所以なり、

是以聖人能成其大也。以其終不自爲大。故能成其大。以下九字。王本無之。姑從今本。

〔解義〕 是以聖人能成其大尊きものとなり玉ふなり、そは其つ

ひに不自爲大尊きものゝふりをし玉はず、我は小なりと卑下しまし、すが故に、能成其大世に尊き聖人となり玉ふなり、

三十五章

〔章意〕 此章は大道を執れば天下服するを云なり、

執大象。天下往。

〔字訓〕 大象は道のことなり、道は一色の象をあらはさず、故に大象と云、十四章の無象之象と同じ、往は即來ることなり、韻を叶へる爲に、往の字を用ゐたるまでなり、

〔解義〕 人君もし好惡剛柔文武の形見ゆれば、好くものは來り、惡むものは去る、好文は文人來りて武人去り、好武は武人來り

て文人去る、天下に於て、來る者あり、來らざる者あり、狹しと云べし、以上本文のそれ大道は無なり、無形無名、人君もしこの道を執り玉ひ、好惡剛柔文武の形、外に見るゝことなく、好もなく惡もなく、剛にもあらず柔にもあらず、文にもあらず武にもあらず、大哉無所成名と云如くなれば、好せらるゝ者もなく、惡まるる者もなく、剛者柔者、文人武人、茶人、碁打、天下みな諸共にこぞり來りて歸すべきなり、

往而不害。安平泰。

〔解義〕 それ好あり惡あれば、好ものには利あり、惡ものには害あり、もし好もなく惡もなければ、好せられて利を得るものもなく、惡まれて害を受くるものもなく、安く平かにゆたかにして

て天下平なり、

樂與餌。過客止。道之出口。淡乎其無味。視之不足見。聽之不足聞。用之不可既。

〔字訓〕 樂は音樂なり、餌は食物なり、

〔解義〕 絲竹の耳に妙なると、酒食の口に適へるは、過客もそゝろに足を止むれども、吾が云ふ道なるものは、たとひ蘇秦張儀の辯をかりて説き出すとも、淡乎として味もなく、絲竹酒食の即時に人を悦ばしむる如くにはあらず、視之不足見、形なし、聽之不足聞、聲なきなり、然るに起て用之ときは、用ゐつくされぬものなり、

三十六章

〔章意〕 此章は、暴を去り害を除くの妙用を云へるなり、

將欲歛之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。是謂微明。

〔字訓〕 微明は、深智のことなり、

〔解義〕 強梁暴亂の者世の害をなすことあらんに、其鋒に向て争ひ、武力にて推し勝つことは得がたきことなり、天道に消息盈虚の運あり、人事に吉凶倚伏の理あり、盛なるものは衰へ、極まるものは變ずる習なり、以上發端、以下本文を説、まさに歛之とする者は、必先すゝめて固く威を張り奮はしめ、まさに弱之とする者は、必先すゝめて固く強からしめ、まさに廢之とする者は、必先すゝめて固く興し盛にし、まさに奪之とする者は、必先すゝめて固く與ふべし、これ勞せずして強梁暴亂を除くの術なり、是を知るを智の深きと云なり、

柔勝剛。弱勝強。此從今本。王本與此異。

〔解義〕 そもく、柔なる者は剛に勝ち、弱なる者は強に勝つ、風の烈も、青柳の絲は折れず、箭の銳も、幕の裊めるは貫かず、

魚不可脫於淵。國之利器不可示人。

〔字訓〕 利は爲になるなり、王註は器を用意とし、國之利器とは、國の爲になる仕方と云ほどの義とす、他説は餘論に載す、

〔解義〕 魚は淵を離るべからず、國の利器は、人に手もとを示すべからず、了以上本文を脱、それ彼剛強ならんに、我も亦剛強にして、武力にて推し勝ち、人の目に立ち、譽むるほどなる、是を國を利するの器を人にみせ示すと云なり、これ俗に云茶碗と茶碗と打合するが如し、たとひ彼を打ち破り得るとも、此も亦傷つくべし、これ害を除くの拙なるなり、もし彼剛なれば、我は柔を守り、彼強なれば、我は弱を守りて抗衡せず、彼の性に因てしむけて、自ら斃れしめ、人その然る所以を知らず、是を國を利するの器を人に示さずと云なり、

〔餘論〕 程子曰。予奪歛張。於理有之。然老子之言。權詐也。又曰。此老子の體用也。と。それ老子以前、此術を用ゐたるもの、越の吳を亡ぼす是れなり、老子以後、此術を用ゐたるもの、韓魏趙の知伯を

亡ぼす是れなり、孫子に不戰して勝つを善の善なる者とす、それ勝敵除害に、兵を用ゐず人を殺さずしてそのこと成る、亦善の善なると謂ふべし、權詐なりとして賤棄すべからず、他説は利器を人君の黜陟刑賞し玉ふ所の大權とす、大權又は威權權柄とも云威勢のことなり、國之利器不可以示人とは、人君威權を自ら握て人に與ふべからず、是れ刃の柄を人にわたすが如しとす、この説に因て論ずれば、この威權と云ものは、握る者に威あり權あり、左右握れば左右威權あり、秦の趙高も左右なり、後宮握れば後宮威權あり、唐の則天も後宮なり、大臣握れば大臣威權あり、魯の三桓も大臣なり、その終り或は君不君臣不臣、名分不正、冠を下にし履を上にするに至り、與其媚於奧寧媚於竈と謂ふに至るべし、昔執政の門に、土方内水野何の守と書て張れることありと云、これ

公用人某の威權、主人に越ゆるををしれるなり、古今この類少からず、然れども威權の下に移るを嫌ふとて、秦の始皇、隋の文帝の如く、獨斷など云ことも、亦その害小ならず、然れば人君の天職は、知^ル人^ヲ、察^ス其^ノ官^ヲ、任^ス人^ヲ、用^ス其^ノ器^ヲ、玉^ヲひ、しかしてその大權は自ら握て人に與ふべからずと云へるなり、

三十七章

〔章意〕 此章、人君無爲なれば、天下自ら定まるをのぶ、道常無爲。而無不爲。

〔解義〕 すべて物に體と用との二つあり、譬へば火の燃ゆる性は體なり、その燃ゆるは用なり、水の流るゝ性は體なり、その流

るゝは用なり、それ道の體は無爲なるものなり、その用は無不爲ものなり、谷の戸出づる鶯の初音も、道の用なり、若葉の梢涼しげに緑茂るも、道の用なり、玉を欺く白露の結ぶも、道の用なり、霜枯に見る人もなき月のすめるも、道の用なり、天地間あらゆる物、あらゆる事、道の用にあらざるなし、これ無不爲ものなり、孔子曰、天何言哉と、これ無爲なり、四時行焉、百物生焉、これ無不爲なり、

侯王若能守之。萬物將自化。

〔字訓〕 化はなほるなり、惡の善に化るなり、

〔解義〕 侯王もし能くこの無爲の道を守り玉はゞ、天下萬民これに化して、同じく無爲にして、各其當然を守りて、事をはかり

營むものなかるべし、

化而欲作。吾將鎮之以無名之樸。

〔字訓〕 樸は前に性のことにたとふ、こゝは無名之樸とあれば、道のことなり、樸はあら木なり、方圓の形なし、道は形なし、故に樸を以て道にたとふ、作は起て事をはかり企つるなり、

〔解義〕 動きやすく恃みがたきは、人の心なり、すでに化して無爲なる者も、時に隨ひ物に誘はれ、或は起て事をはかりなさんとする者あらんに、智もて制すれども止まらず、刑もて威せども懲りず、これみな制之の機括にあらず、吾たゞ無爲の道を以てこれを鎮めて、はかりいとなむことなからしむべし、

無名之樸。夫亦將無欲。

〔解義〕 無爲の道おこなはるれば、人亦無欲なるものとなるべし、飢えずさむからず、風雨に犯されずして、閑にすむすを樂とす、

無欲而靜。天下將自定。

〔解義〕 蟻の如くあつまりて、東西にいそぎ、南北にはしる、貴あり賤あり、老あり少あり、行く處あり歸る家あり、夕に寐て朝に起き、いとなむ所、なにごとぞや、生を貪り利を求めて休むときなし、法師の語、世の騒がしきは、欲に由るなり、人々無欲にして靜ならば、天下自ら定まるべし、

老子講義卷四

牧山佐藤先生著

淺野三龍
石川素童 同校

下篇

三十八章

〔章意〕 此章道德を上とし、仁義禮智を下とす、就中禮智を以て最下れるものとす、人はつやかざりを去りて實意を主とし、狡黠ワカサシコキを止めて無爲なるべしと云へるなり。

上德不德。是以有德。下德不德。是以無德。

〔解義〕 上徳の人は、自ら徳ありとせず、故に誠に徳あり、老子又曰、君子盛徳、容貌如愚、これなり、下徳の人は、自ら徳ありとす、故に無徳、兼好法師曰、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなりと、亦この意なり、

上徳無爲而無不爲。下徳爲之而無以爲。モチキテ
今王本有誤
他本。

〔字訓〕 以は用なり、こゝろを用ゐてするなり、

〔解義〕 上徳は無爲なり、然れども無不爲なり、譬へば天の如し、それ風は嘆し、雷は震ひ、水は潤し、火は燥す、皆それくくに爲すことあり、たゞ天は爲すことなし、これ無爲なり、然れども天地間の物、その終るもその始まるも、天の爲にあらざるなし、これ無不爲なり、下徳は即上仁のことなり、下徳は仁を以て愛を施

るなり、これ爲之なり、然れども彼の爲此の爲と、分隔の心あるにあらす、これ無以爲なり、譬へば風の如し、をりく、寒さの互回、春めき兼たるに、や、春風の吹き頻れば、一重八重、桃に櫻に咲き初めて、色香争ふ、氣色なるは、これ風の恵なり、これ爲之なり、然れども春風に心ありて、桃や誘はん、櫻や催さんとするにあらす、これ無以爲なり、

上仁爲之而無以爲。

〔字訓〕 下仁下智下禮は、言ふに足らず、故にたゞ上なるものがあるなり、

〔解義〕 上仁即下徳なり、説上節に見ゆ、上仁は仁を以て愛を施すなり、これ爲之なり、然れども此の爲彼の爲にせん、の分隔の

心あるにあらざるなり、平均一面に愛を施すなり、これ無以爲なり。

上義爲之而有以爲。

〔解義〕 上義は義を以て物を正す、これ爲之なり、抑曲、右直、心を用ゐてするは、これ有以爲なり。

上禮爲之而莫之應、則攘臂而扔之。

〔解義〕 上禮は禮を以て敬を行ふなり、これ爲之なり、然れども禮尙往來、往けば來り、來れば往く、もし我より敬を行ふて、彼それ應をなさざれば、怒を發し、臂を攘り、扔きよせて打ち闘ふなり、これ莫之應、則攘臂而扔之なり、さればこそ仁は德より下

り、義は仁より下り、禮は又義より下る、最いやしきわざにして厭ふべきことなれ、

故失道而後德。

〔字訓〕 道は天地間にある上にて云なり、德は人や物の持てる上にて云なり、

〔解義〕 道は固より無なり、德と云も亦無を以て德とするなり、そもく道は無にして、萬物の本たるものなり、その中より人物各その道を資り得て、己一分の德として持てるなり、これ道分散し道たる形を失て後德と云ものになるなり、

失德而後仁。

〔解義〕 各徳を全うして無爲ならば、とり分け愛を施すにも及ばず、それなりのことなり、無爲なること能はず、失徳て後に、仁もて愛を施すこととなるなり、これ仁は下れるものなり、

失仁而後義。

〔解義〕 仁もて愛を施し、博く及ぼすこと能はず、而して後此は善彼は惡と隔てありて、義もて正すことゝなるなり、これ義は又下れるものなり、

失義而後禮。

〔解義〕 義もて邪を正し、質直なること能はず、故に禮を以て外を飾り、善人にもよく交り、惡人にもよく交ることゝなるなり、

これ禮は最下れるものなり、

夫禮者。忠信之薄。而亂之首。

〔解義〕 それ禮は、忠信の薄きより起り、しかも争亂の首なり、兄の足を履めば、撫づるのみ、他人の足を履めば、放恣を謝す、莊子これ禮儀かたきは、忠信の薄きによるをみるべし、吾より敬を行ふて、彼應ぜざれば、攘臂而扔之、はやくも鬪となるなり、これ亂の首なるをみるべし、初より禮と云ことなくば、かゝる争はなかるべし、

前識者。道之華。而愚之始。

〔解義〕 前識は智なり、人より前にはやくさとるなり、道の華に

して實用にたゞず、しかも勞して益なし、愚の始なり、桃栗も三年に花さけども、費に用ゐる食に供するは實なり、花はうるはしきばかりにて用をなさず、これ華の貴ぶに足らざるをみるべし、世の智者は、往々自ら罟獲檻阱に陥るあり、その智は智に非ず、愚の始のみ、

是以大丈夫處其厚。不居其薄。處其實。不居其華。故去彼取此。

〔解義〕 是を以て大丈夫たるもの、忠信の厚きに身を置いて、禮の薄きには居らず、道の實に身を置いて、その智の華の如く用をなさざるところに居らず、故に彼の禮と智とを去て、此忠信と道とを取るなり、

三十九章

〔章意〕 此章は、屈伸變通の妙を云なり、この義は孔子たゞ周易繫辭傳に於ての「玉へり、曰。往者屈。來者伸。又曰。尺蠖之屈、以求伸也、龍蛇之蟄、以存身也、これ聖人の妙用、凡人の所不知なり、

昔之得一者。

〔字訓〕 一とは道のことなり、道は二つもなく三つもなし、たゞ一つなり、故に一と云なり、

〔解義〕 そもく、萬物の始まりは、各一箇の道を資り得て生ずるものなり、譬へば菜の種は生じ易しと云へども、箱に入れ袋

に置けば、芽を出さず、これを土中に蒔きおけば、天地の氣を受け得て芽を生ず、これ物は獨でに生ずるにあらず、必氣を資り得て生ずるなり、萬物の一箇の道を資り得て生ずるとはこのことなり、老子は氣をさして道と云、儒家は理をさして道と云、理と氣とは、もと混合して相離れざる者なり、故老子亦或は理を指て云あり、

天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以生。王侯得一以為天下貞。

〔解義〕 天は一の道を得て清めるものとなり、天は動、地は靜なるもの、故に清と云なり、地は一の道を得て寧きものとなり、天は動、地は靜なるもの、故に寧と云なり、神は一の道を得て靈なるものとなり、谷は一の道を得て盈つるものなり、谷は一の道を得て盈つるものとなり、

なり、谷は虚なる故に外物聚りて盈つる、故にかく云へるなり、萬物は一の道を得て生ずるものとなり、侯王は一の道を得て天下の貞しき手本たるものとなり玉ふなり、

其致之一也。王本無一也二字

〔字訓〕 致はなしおほせるなり、

〔解義〕 その天の清を致し、地の寧を致し、神の靈を致し、谷の盈を致し、萬物の生を致し、侯王の天下の貞たるを致すは、皆一の道にて、なりおほせたるものなり、

天無以清。將恐裂。地無以寧。將恐發。神無以靈。將恐歇。谷無以盈。將恐竭。萬物無以生。將恐滅。侯王無以貴高。將恐

魔オン

〔字訓〕 以は用なり、心を用ゐてするなり、おもふの意、以、以爲、常に用ゐる字なり、

〔解義〕 天は清まんと以ふ心なく自ら清みたるなり、もし清まんと以ふ心にて漸く清み得たるものならば、その心なき時には裂くべし、譬へば灯の挑き立てずして自ら明アカルキが如し、もし挑立てたる力にて明アカるきならば、挑き立てざる時には暗くなるが如し、地は寧オモシからんと以ふ心なく自ら寧オモシきなり、もし寧オモシからんと以ふ心にて寧オモシきことを得たるものならば、時としては發ツクくべし、神は靈オモシならんと以ふ心なく自ら靈オモシなり、もし靈オモシならんと以ふ心にて靈オモシなることを得たるものならば、時としてはそ

の靈オモシなるところ歇オモシむべし、谷は盈オモシたんと以ふ心なく盈オモシつるやうになり得たるなり、もし盈オモシつるやうにならんと以ふ心にてなり得たるものならば、時としては盈オモシつることなるまじきなり、萬物は生オモシぜんとして以ふ心なく自ら生オモシずるものなり、もし生オモシぜんと以ふ心にて生オモシじ得たるものならば、時としては滅オモシすべし、侯王は貴高オモシならんと以ふ心なく自ら貴高オモシなるものなり、もし貴高オモシならんと以ふ心にて貴高オモシになり得玉ふものならば、時としてオモシは蹙オモシかん、これ皆その心なく自らなり得るものなるが故、つくと云ためしなきなり、

故貴、以賤爲本。高以下爲基。

〔解義〕 故に貴きは賤しきが本となりて貴きなり、高きは下き

が基となりて高きなり、

是以侯王自謂孤寡不穀。此非以賤爲本耶。非乎。

〔字訓〕 孤はみなしむなり、寡は寡人のこと、徳すくなき人と云義なり、不穀はよからざるものと云へるなり、

〔解義〕 是を以て侯王の貴きも、自らひきくし玉ひて、我は孤なり寡人なり不穀なりと云ひ、貴きものなりとは稱し玉はず、それ故にこそいと貴き侯王となり玉ふなれ、これ貴、以賤爲本には非ずや、さやうには非ずや、よくく思ひわくべきなり、

故致數車無車。車。王本作譽。今據他本。

〔解義〕 それ車は、いづれか車なるぞと、一々これを數へみれば、

軾なり、輶なり、輪なり、輻なり、輿なり、軸なり、いづくにも車と云ものなし、今貴人も亦然り、いづれか貴人たるところぞと尋ねれば、孤なり、寡人なり、不穀なり、いづくにも貴人らしきところなし、嗚呼是天地間屈伸變通の妙理なり、屈せざれば伸びず、屈して孤寡不穀となり玉ふ故に、伸びて貴くましますなり、

不欲珠玉。珞珞如石。

〔解義〕 この故にかの玉の珠々と堅きのみ、石の珞々と堅きのみなるが如きを不欲なり、玉は貴きと云へども、石は賤しきと云へども、さすがに無情の物なれば、共に堅きは堅きにとどまりて、變通の妙を得ざるなり、人はかゝる不器用なることは、このましからざるなり、

四十章

〔章意〕 この章は、物に本末と云ことあり、本に復り、末に趨るべからざるを云なり、

反者道之動。

〔解義〕 それ無は本なり有は末なり、静は本なり躁は末なり、もし末にうつり躁がしければ、その心紛亂して必ず事を仕損ずるものなり、以上たゞ本に反ること、道なる動き様なれ、文を説、本有は無に反り、躁は静に反り、たとひ事變紛々たる中にてても、己は凝然として心動せず静まりて、徐にその事を處置するなり、周公且流言の變に遇て、赤舄几々、足もと徐なるも是れなり、諸葛孔

明戦に臨み、角巾羽扇、從容指揮するも是れなり、孟子浩然の氣の章、不動心を貴ぶ、つまり同意なるべし、

弱者道之用。

〔解義〕 秦の強も亡び、楚の項羽の強も亡び、木曾冠者の強も亡び、武田四郎の強も亡ぶ、強の恃むべからざる如此、以上それ弱なるは道の用なり、ハタラキ末ながく保たんと欲せば、たゞ弱となるべきなり、終に強に勝つの道なり、越王勾踐の吳に従ふ、この道なり、東照公の豊公に和親を結ばれたる、この道なり、

天下萬物。生於有。有生於無。

〔字訓〕 有とはすべて形ある物を有と云、ヒト泛き辭なり、余の舊説、

林註に從て天地をさす、再思するに未穩を覺ゆ、有は氣をさして云なり、改めて從吳氏說、無は道のことなり、即理をさして云なり、

〔解義〕 天下諸有、これを數へて萬と云へども、萬に止まらざるべし、その數多種々の物は、いづれより生ずるや、氣より生ず、氣聚りて形を造すなり、その氣は何れより生ずるや、道より生ずるなり、道は無聲無臭なるものなり、あゝ無は天地の本なり、たゞ此無に反るべきなり、

〔餘論〕 周易復の卦古註には、靜に復るの義とす、周濂溪太極圖說、主靜、みな人の心靜なるべきを云なり、鏡搖けば影寫らず、心靜ならざれば慮出でず、これ靜に復り本に反るべしと云ゆゑなり、

四十一章

〔章意〕 此章は、道は常情の外に出たるものにて、下愚のよく知る所にあらず、必上根の人、よく入ることを得べきを云なり、

上士聞道。勤而行之。中士聞道。若存若亡。下士聞道。大笑之。不笑不足以爲道。

〔解義〕 上士は聞道て善解り、退轉なく行ふなり、中士は聞道て半信半疑、生解りにて若存若亡なり、下士は聞道て大に笑ふなり、笑ふも宜なり、かれらには分らざるなり、愚人に分らぬ故に貴し、もし愚人の不笑、分る程の淺はかなることならば、道とす

るには足らざるなり、

故建言有之。

〔解義〕 故に古の人の言ひおきし教にあり、そのこと下にのぶる如し、

明道如昧。

〔解義〕 誠に智の明なる道は、其智を耀かさず、能ある鷹の爪かくし、よそめには昧くして智なきが如くみゆるなり、

進道如退。

〔解義〕 誠に進むの道は、人と争はず謙にして、頓て人より推し

進むるは、よそめには退く如くみゆるなり、

夷道如類。

〔字訓〕 類は塊と通ず、つちくれなり、高低ありて平かならざるなり、

〔解義〕 誠に公平なる道は、その公平なるところ目立たずして、よそめには塊の様に平かならざる如くみゆるなり、

上徳若谷。

〔解義〕 上徳の人は、有徳ふりをせず、谷の虚しきが如くなり、

太白若辱。

〔解義〕 太潔白なる人は、その潔白目立たずして、よそめには辱ハナハて潔白ならざる如くみゆるなり。

廣徳若不足。

〔解義〕 その器量の廣大なる人は、その徳すでに備るが上にも、猶常に足らざるが如くなり。

建徳若偷ナラシク

〔字訓〕 建は書經に皇建有極キの建と同じ、その性を建てすゑたるなり、

〔解義〕 己が性分をよく建てすゑたる徳の人は、これ人に首出キたる人なれども、それを矜ることなくして、常人と偷ナラシク匹ヒ同じも

の、如くなり、

質眞若渝。

〔解義〕 天性のまゝにして、質眞なる人は、その質眞を自負することなく、天性を渝へたる人の如くみゆるなり、

大方無隅。

〔解義〕 大方正の人は、その方正、目立たずして、廉隅なきが如くなり、天地は東西南北四方と云へども、方隅なきが如くなり、

大器晩成。

〔解義〕 小器は速に成るべし、大器は成上り晩きなり、大鐘大鼎

を鑄る如き、一朝一夕には成らざるべし、

大音希聲。

〔字訓〕 希は無なり、

〔解義〕 高下清濁一、いろの音は、小音なり、高下とも清濁ともいまだ音に發せざる所、これ大音なり、大音は聲なし、道はすべての音の本なる故に大音と云、

大象無形。

〔解義〕 夏の炎、冬の寒、一、いろなるは、小象なり、炎とも寒ともいまだ顯れざる所、これ大象なり、大象は形なし、道はすべての象の本なる故に大象と云、

道隱無名。夫唯道善貸且成。

〔解義〕 をもく、上文のぶる所種々のことは、みな道のなす所なり、その道たる隠れたるものにて、目にみるべからず無名ものなれども、それたゞ道は、善くその力を物に貸し與へ、且それをこれに成就せしむるものなり、

四十一章

〔章意〕 此章、道體は虚無なるものなり、しかして天地萬物の本なり、人この虚無の道を心得て、謙遜の場に身を置くべし、これ其身を全うするの方なり、首節四句極て解し難

し、王註は莊子の説なり、恐くは老子の意にあらず、余の舊説は、司馬溫公の説に本づけり、後又再思するに未穩を覺ゆ、今且吳臨川の説に本づき説去る、此章道の字、形而上の理を指て云、

道生^一。一生^二。二生^三。三生^四。萬物。

〔解義〕 それ道は無より一氣を生じ、一氣陰陽の二氣となる、これを道生^一、一生^二と云、すでに陰陽の二氣あれば、頓て其間に生^レ和、陰陽の二氣、細^シ縷^トとして和調す、これを二生^三と云、陰陽和の三^ノもの具^ハれば、萬物を生成するの器備^ハり、火は火の形をなし、水は水の形をなし、鶯は白鳥は黒、萬物それ^レの形をなす、これを三生^四萬物と云、

萬物負^レ陰、而抱^レ陽。冲氣以爲^レ和。

〔字訓〕 負抱とは、物の體^カは背は陰腹は陽とす、故に負陰抱陽と云、冲は虚無のことなり、

〔解義〕 萬物はその形さまざまなれども、いづれも背は陰腹は陽、陰陽の二つを具へ、その間に虚無なる氣ありて、和し調ふて、知覺運動、一身のはたらきをなすなり、さては天地間萬物の體をつらく、觀るに、その生ずるの本は、虚無なる道より生じ、すでに生じたる上にも、猶また虚無なる氣を具へて、その物々の働きをなすなり、虚無の貴き如此、宜なり王公の虚無を以て旨とし玉ふこと、

人之所^レ惡、唯孤寡不穀。而王公以爲^レ稱。

〔解義〕 凡そ人のきらふ所は、たゞ孤寡不穀など云ことなり、し
 かるに貴き王公は、その身のことを謙遜卑下して、孤寡不穀と
 稱し玉ふは、これその心虚無なるなり、それ故に萬民いよく
 貴びて、王公とて崇め戴くなり、かゝらざりせば、かゝらざらま
 しとは、これなるべし、

故物或損之而益。或益之而損。

〔字訓〕 損はへらすなり、卑賤を云、益はますなり、尊貴を云、

〔解義〕 故に世の中のさまは、我より損せば人より益し、我より
 益せば人より損す、これ自然の道理なり、今夫王公は、自ら孤寡
 不穀卑賤ものと稱し玉ふ、故に人よりこれを貴びて、王公の貴
 人とはなり玉ふなり、これを損之、而益と云なり、もし王公の貴

き、その貴きに驕り玉ひ、視人如土芥この字孟に田ゴ、なれば、人よりこれ
 を疎み離るゝなり、これを益之、而損と云なり、以上本文書に曰、滿
 招損、謙受益、亦この理なり、

人之所教。我亦教之。強梁者不得其死。吾將以爲教父。

〔字訓〕 強梁はつよきなり、其死とは、身を全うして終るを云な
 り、父とはもとなり、

〔解義〕 世の人みな教と云ことあり、我も亦人に教ふべし、たゞ
 我教ふる所は、世の人と異なるのみ、それ世の態をみるに、強梁
 者は、その終を全うするを得ず、多くは害にあふものなり、これ
 謙柔なる道知らざるによる、前車の覆るは、後車の誠なり、吾
 らもさにかゝる強梁なる人を以て、我教の本とせんとす、子路の

勇過て、其死然を得ざるもこの故なり、慎むべきことなり、

四十三章

〔章意〕 此章、聖人は無爲なり、故によく衆強を制御し、群有に出入すること自在なり、人亦これを法とすべきを示すなり、

天下之至柔。馳騁天下之至堅。無有入於無間。吾是以知無爲之有益。

〔字訓〕 馳騁は自由にはせあるくなり、堅は剛強のことなり、無有は無形なり、無のことなり、

〔解義〕 それ山谿の險しき、岩の争ひ出て、さも危げにみゆるな

かも、たゞ柔弱なる水は、西に東に、自由に流るゝなり、以上譬喩、實に堅き者は、堅き者を制御すること能はず、天下の至柔なる者は、天下の至堅なる中をも、自由に馳騁とほり、堅剛を制御し得べきなり、二句を説、冬の寒さに玉簾たれこめたる内までも、風に誘はるゝ梅ヶ香は、人知らず暗に通ふなり、以上譬喩、實に有形ものは、さゝはることあり、たゞ無形ものは、間なき中にも入るなり、これ皆無爲の用なり、かゝる例によりてこそ、無爲の益あることを知る、

不言之教。無爲之益。天下希及之。

〔字訓〕 林註に、益とは有_三功用_一なり、

〔解義〕 それ言にのぶる教は淺し、爲_レのなすことは狭し、たゞ不

言して教行はれ、無爲にして功成る、これ至道の妙用なり、然るに天下の人、智淺くしてその理を知る者稀なり、これ我柔にして剛強を制御し、我無にして群有に出入すること能はざる所以なり、

四十四章

〔章意〕 此章、世人の名聞利養の爲に身を殞すものを誡むるなり、毎句中押韻、身と親とは一韻、貨と多とは一韻、餘もみなこれに同じ、尤巧なり、

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病。

〔字訓〕 多は大切なり、病はなんきなり、

〔解義〕 世の人多くは名聞利養の爲に、眼くらみ心迷ひ、苦しむ營みて、終にその爲に、命を殞し身を果す、そもよく心をしづめ思ひ分くべきことなり、以上發端、名聞は我身と引き比ぶるに孰か大切なるべき、本文を、かの謠曲に、されば此弓を敵に取られ、義經は小兵也と云はれんは無念なり、よしそれ故に討れんは力なし、義經が運の極と思ふべし、さらば敵に渡さじと、浪に引かるゝ、弓執りの名は末代に非ずやとあるも、ゆるしく恃もしく、武夫の本意とも聞ゆれども、身ありてこそ人を助くることもなり、忠孝の道もなるべくば、好の語、兼、あたら命を名聞の爲に棄てんこと、惜きことならぬ、以上名與身孰親の一句を、我身と貨財と引き比べんに、孰か尊きものなるべき、本文を、一期の樂は、假寐の枕上に極まり、生涯の望は、折々の美景に残る、明の語、長、と思ふまでこそ

難からめ、飢えず寒からず、風雨に犯されず、兼好の語、衣食住に有るに任せて世を過さば、事か、ぬを云なり、なにか過し得ざらんや、然るに己五十年の榮耀をいとなみ、貨財はもと身を助くる爲のものなるを、貨財の爲に身を亡ぼすは、本意なきことなり、以上身與貨財、多の一句を説名利の二つを得たると、我身一つを亡ぼすとを引き比べんに、孰かなんぎなるべき本文を了、たとひ名利の二つを思ふやうに得たりとも、我身なくば何にかはせん、これを吉田の法師の云へる如く、春の日に雪佛を作り、その爲に金銀珠玉を飾り、堂塔を營み建つるに同じ、建てる下より雪は消え融けて珠玉堂塔のみを殘るべき、愚なる哉世の人の命にかへて名利を貪ること、以上得與亡、病の一句を説

是故甚愛必大費。多藏必厚亡。

〔字訓〕

愛は吝チムなり、費は損をするなり、藏は貨財を儲ふるなり、

〔解義〕

この故に吝むことの甚しきは、一旦に大に損することあり、楚の項羽有功者に封を行ふことを惜み、印シム彫るれども與へ兼たれば、烏江に於て戦ひ敗れ、その國はみな漢の物となるこれなり、以上甚愛必大費、多の一句を説貪りて藏タムふること多きものは、一旦に亡ふことも亦多きものなり、殷の紂王の鉅橋の粟、鹿臺の財これなり、以上多藏必厚亡、病の一句を説

知足不辱。知止不殆。可以長久。

〔解義〕

こゝに長く全かるべき道あり、足ることを知てその上に願まざれば辱を受けず、止まることを知てその上を求めざれば殆きことなく、以て長久に全かるべきなり、以上本文、林希逸

曰、此三句、千古萬古、受用不盡者と、世間才能の士、終オハリを全うせざるは、大抵、不知足、不知止によりてなり、

四十五章

〔章意〕 この章は、聖人の大用を云なり、

大成若缺。其用不敝。大盈若冲。其用不窮。

〔字訓〕 成はかけめなく十分なるなり、敝はやぶれ盡くるなり、冲は虚なり、

〔解義〕 花は盛りに月は隈なきをのみみるものかはと、古人も云へり、實に花の盛りは長からず、月の満つるも久しからず、花月無情の物すら猶然り、況や人に於てをや、この故に君子の世

に在るや、盛滿に處するの道を知らずんばあるべからず、いでその道をかたらん、それ君子も我より求むることはせざれども、時により勢により、成に至り、盈に至り、盛滿の境なきにあらざれども、その成や、若缺にしてその盛を極めざれば、ながく缺くることなくして、その用敝ることなきなり、その盈や、虚きが如くにして盈てりとせざれば、ながく虚しきことなくして、その用盡くることなきなり、これ君子盛滿に處するの道にして、しかも盛滿を保つの道なり、以上本文、程子曰、聖人有亢之時、無亢之心、是なり、亢は盛滿なり、

大直若屈。大巧若拙。大辯若訥。

〔解義〕 胴脈散人曰、味噌の味噌臭きは、上味噌に非ずと、これ鄙

しき諺なれども、萬この心ばえにて、それとみゆる風情なかるべきなり、されば大直如屈なり、父爲子、隱子爲父、隱と云へり、大巧如拙なり、萬物は天地化工の細工より出ざるなく、一花一葉の微に至るまで、その巧妙を極むれども、飛驒の工左り甚五郎と名を争はざるなり、大辯如訥なり、孔老の言千萬世に垂れり、これによりて道も傳はり理も明かなれども、蘇秦張儀の三寸の舌を掉ふが如くにあらざるなり、

躁勝寒。靜勝熱。清靜爲天下正。

〔解義〕 冬の寒さ夏の熱きは、天地の氣候なれば、天下一般おしなべたるものにして、玉の扉柴の扇の隔てなく、かにもかくにもすべき方なきものなれども、それすら人の處しやうにて猶

遁るべき道こそあれ、以上身躁がしく動きはたらけば、冬の寒さに勝て袒をも脱ぐべし、心靜におちつきて在れば、夏の熱きに勝て汗をも流さざるべし、これ人の處置の貴き、天地の氣候にも勝つべきなり、さりながら躁は勞して勝ち、靜は逸して勝つことなれば、靜にこそあるべけれ、そもく清靜なるは天下の正たり、たゞ清靜を以て天下に示すべし、上清靜なれば下清靜にして天下無事なり、以上本文凡そ世の躁がしきは、上清靜ならざるによる、纔に清靜ならずして事を好むの朕兆あれば、臣下それより附き入て、平地に波を起し、天下騒然、不知所底止に至り、その害あげて言ふべからざるものなり、

〔餘論〕 周易老子、ともに盛滿を戒とす、これ盛滿をにくむに非ず、盛滿の保ちがたきを以てなり、花は半開、酒は半酔、その盛滿

を戒むるは、これ即盛満を保つの道なり、邵康節の詩に云、只喜成微醺、不喜成酩酊、これ亦この意なり、古より人臣の官貴く位盛にして、終に一敗塗地、至不可救ものは、みな盛満の戒を知らざるものなり、

四十六章

〔章意〕 此章は、天下の大亂は、みな人君の慾心より起る、人君足ることを知り玉ふべきことを云へるなり、

天下有道。却走馬以糞車。一本有車字。韻叶。今從之。補車字。

〔字訓〕 糞は田のこやしなり、

〔解義〕 うしろより御敵大勢にて逐駈たり、防矢仕らん詠曲と

て、今井兼平の手綱を返し、も馬なくば争で返さん、佐々木四郎宇治川の先陣も、馬なくば争で渡さん、馬は軍務の必用なり、以上發端、されば天下に無爲の道行はれて靜謐なる時は、一日千里追風逐電の駿馬も、何にかはせん、たゞ却つて農馬とし、糞車をひかしむべし、

天下無道。戎馬生於郊。

〔字訓〕 戎は軍なり、生は諸解在の義とす、郊は野原なり、戰場を云なり、

〔解義〕 天下に無爲の道行はれず、騷亂なる時は、鏑たれども此刀、瘦たれども此馬と、詠曲馬を貴ぶ世となりて、軍馬郊野に在て、戰場の用となる、

禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。

〔字訓〕 咎亦禍なり、

〔解義〕 そもく、その馬を貴ぶ天下の騷亂は何より起るや、只人の慾心より起る、漢楚七年の戦も、劉項二人の慾より起り、保元平治三十年源平の大亂も、美福門院の慾より起る、以上、されば禍は足ることを知らずして、猶その上を望むより大なる禍はなし、咎は己の分にあらざるをも取得んと欲するより大なる咎はなし、とりわけ人君の戒め玉ふべきは慾心なり、
故知足之爲足。常足矣。

〔解義〕 それ人その上を欲のぞみて、足るが上にも足らずとせ

ば、四海の富を保つも猶足らず、太閤の朝鮮を伐つもこれなり、萬乗の尊に陞るも猶足らず、胡元の日本を襲ふもこれなり、以上、たゞ知足之爲足、今あるなりにて足れりとすれば、常に足りて心に不足の念なし、それ心に不足の念なければ、外に求むるところなく、その身安く天下靜謐なるべきなり、

〔餘論〕 それ兵はもと禁暴除亂の具なり、然るに後世に至りては、これを以て爲暴興亂、その本意を失へり、これその本はみな不知足欲得より起る、神武天皇即位より、朱雀天皇の天慶元年まで、千五百九十八年の間に、兵革の動くこと十二度、天慶二年將門純友が亂を起し、より、文治元年春平家亡びしまで、二百四十七年の間に、兵革の動くこと凡そ十二度、文治元年鎌倉の治となりしより、天正十八年小田原滅亡まで、四百六年、を

の内正中元年 後醍醐天皇鎌倉を滅ぼさんことを謀り玉ふを始とし、後遂に南北二帝に分れ、南朝は新田義貞楠正成等輔け、北朝は足利尊氏帝を立てたり、その後應仁元年細川勝元の黨十六萬人、山名宗全の黨十一萬人、諸國より京師に聚りて相戦ふ、それより以後諸國割據して争雄、太閤小田原の役に至りて、大抵天下一統す、就中新田楠等の勤王の擧のみ、禁暴除亂、兵の本意に叶へるか、

四十七章

〔章意〕 此章は、聖人はその心外へちらず、オホシレム收斂ものなり、故に其智明なり、凡そ人これを則として、心の外事に奪はれざるやうにすべしと云へるなり、此章の意、道學の緊要と

する所の敬の工夫に似たり、その言粗の如くなれども、甚密なり、

不出_レ戶、知_二天下、不_レ窺_レ牖、見_二天道。

〔解義〕 夫一花開て天下の春なることを知り、瓶水凍て天下の寒きことを知る、語の以上發端、淮南子の況や聖人は執_二古之道、御_二今之事、玉ふに於ては、その身、戸を出でずして居ながら天下の事を知り、牖を窺はずして坐しながら天道の運メシヤカキを知り玉ふことなり、

其出彌遠、其知彌少。

〔字訓〕 出は心の外へ出適くことなり、即物事に心の迷ふことなり、閑思雜慮と云の類みなこれなり、知の字、韓非子に作智、上

文の不出とは身のことなり、此の出は心のことなり、

〔解義〕惜花春起早、愛月夜眠遲。と云へる理にて、花をみれば花に心うつり、月をみれば月に心ひかる、すべて出適きやすくして定靜なりがたきは、人の心の習なり、もし人富貴聲色喜怒好惡、この爲かの爲にその心ひかれ、迷ひ昏みて、適くこといよく、遠ければ、腔子は空蟬の蛻となりて、その智いよく、昧きものなり、昔楚の白公、亂を興さんことを謀りて、杖を倒に植て、その銳にて、願を傷つけ、血の流るゝを知らず、惟任光秀、主に叛かんことを謀りて、端午の糕を包めるまゝに食へりと云、これ皆心の出適きて、智の昏き證とすべし、莊子の所謂螳螂を捕へんとして、後に狙ふ雀あるを知らず、雀は螳螂を捕へんとして、後に狙ふ人あるを知らず、人は雀を捕へんとして、

後に吏人の咎むるあるを知らずとは、この譬なり、註に人を謀りて人の己を謀るを知らずと、世人この類尤多し、みな其出彌遠其知彌少のことなり、かゝる昧き智にて事を處置すれば、そのことを誤るべくして、白公の敗、惟任の狂謀、固よりその所なり、

是以聖人不行而知。不見而名。不爲而成。

〔解義〕是を以て聖人の心は、外へうつりゆくことなく、常に惺惺たり、故に不行して居ながらその事の得失を知り玉ひ、不見して暗にその物の是非を名のり分け玉ひ、不爲して自らその業を成し得玉ふ、これみな聖人定靜なる心より出る自然の妙用なり、

四十八章

〔章意〕 此章、無爲の益廣大にして、天下を取るの大事も、只この無爲にてなし得べしといへるなり、

爲_レ學_ニ日_ニ益_ス。爲_レ道_ニ日_ニ損_ス。損_レ之又_レ損_ス。以_レ至於_ニ無_レ爲_ニ。

〔解義〕 すべて學を爲す者は、知らざることを知り、習はざることを習て、日々に智を益し能を益さんとするものなり、それに引き換へ道を爲す者は、知ることを止め、習へることをすて、日に智を損し能を損すものなり、損之又損、損し盡して損すべきなく、以至於無爲なり、

無爲而無不爲。

〔解義〕 果して無爲なれば、己手を勞せずして、萬物の自然に任せ、二字、無爲の鳶飛び魚躍り、農耕し商賈ひ、萬物己がさまぐを爲し營みて、ならざることなきものなり、三字、無不爲の

取_ニ天下_ヲ。常_ニ以_テ無_レ事_ニ。

〔字訓〕 無事は即無爲のことなり、常とはいつもなり、

〔解義〕 それかるが故に天下を取るは、常に無爲の道を以て取り得るなり、それ人君拱手コノタテマましくて、智ある者は謀り、勇ある者は戦ひ、各其任に當り、其職に稱へば、統御の方を得て、天下に抗衡する者なく、天下自らその掌握に歸す、これ取_ニ天下_ヲ以_テ無_レ爲_ニすべき所以なり、昔漢楚七年の戦も、正中以後二百六十七年の大亂も、争ふ所は天下なり、さしも取りがたき天下をも、たゞ一

つゝの無爲の道にて取るべければ、無爲の貴きを知るべきなり、

及其有事不足以取天下。

〔解義〕 もし無爲なること能はずして、有爲なれば、天下を取ることに能はざるなり、そは自ら才を恃み能に矜りて、物に任せず、智ある者を棄て、一己の謀を運し、勇ある者を棄て、自ら弓矢手挟み、眞先に駈出んとす、豈天下を取り得べけんや。

四十九章

〔章意〕 この章、聖人天下を治むるの妙用をのぶるなり、

聖人無常心。以百姓心爲心。

〔解義〕 聖人の心、適もなく、莫もなく、かくと定まる心なし、天下百姓の心を以て、己が心とし、百姓の好することは、好してこれを仕向け、百姓の惡むことは、惡みてこれを去り玉ふなり、

善者吾善之。不善者吾亦善之。德善。

〔字訓〕 不善は不能のこと、劣れる者を云なり、

〔解義〕 善者吾固よりこれを善とす、不善にして劣れる者も、吾亦これを善として棄てざれば、善も不善も、その徳みな善となるなり、譬へば善は玉、不善は石、玉は寶、石は礎、各とりえありて、皆それぐの用をなす、これをその徳善と云なり、

信者吾信之。不信者吾亦信之。德信。

〔解義〕 信なる者、吾固よりこれを信とす、不信なる者も、吾亦これを信として除けざれば、信も不信もその徳みな信となるなり、誠しき心から忠なるものは、固より忠とし、名利の爲に忠なるものも、忠となしおけば、みな忠臣なるが如し、

聖人在天下。歛歛爲天下。渾其心。百姓皆注其耳目。聖人皆孩之。

〔字訓〕 歛々王註は心無所主と云て、心のぶらりとしたる意なり、爲天下とは、向天下の意なり、爲の字多くこの義に用ゐたり、渾はまろきなり、無圭角なり、注其耳目とは、耳をつけてき、目をつけてみることなり、孩はをさなむなり、やうやく笑ふことを知る幼子を孩と云、

〔解義〕 聖人の在天下、歛々として天下に向て其心をまろくして、圭角なきものなり、天下の百姓、各耳を注てき、目を注て視己がさまぐに爲しはたらくものなり、聖人その上に在てこれを治め玉ひ、みな嬰孩の如くうち和げて、無欲ものとならしめ玉ふなり、

〔餘論〕 聖人無常心。以百姓心爲心。これ即大學所謂民之所好好之。民之所惡惡之。此之謂民之父母の意と全く同じ、不善者吾亦善之。徳善一説に、不善者は小人のこと、若この説の如く解するも、小人を化するの妙術なり、小人の小人たる所を發き、不善なる者とすれば、彼もはや世にたのみなく、いよくその惡を恣にするものなり、故に不善なる者も、吾亦善として、よくあしらひおけば、不善をいたし兼ねて、つひにはその徳善になる

ものなり、兒童の横着ヨコガキなる、おとなしと譽むれば、横着をいたし兼ねるもこのわけなり、これ點鐵成金の妙機なりといへり、東照公伏見に居玉ひしとき、關東より飛脚來りて、江戸御城下に、夜に入候へば、御旗本の壯士共、辻切ツツギキ致し候故、日暮ては往還止まり、諸人難儀に及ぶ由を聞玉ひ、板倉伊賀守へ仰せオホセに、是は以前其方物語にて呼び出したる鷹匠何某を遣し候はゞ、辻切止めて來るべき者ならんに、今何方に居候やと尋ね玉ふ、伊賀守答へて、如何にも其者に候はゞ、止させて歸るべき器量の者なり、私方に居候事も可有之候、左様思召候はゞ、呼び寄せ可申哉と申上げければ、早々是へ呼び出し候へとの仰せオホセに付、即て召し出だしぬ、さて唯今召し出され候事、別儀に非ず、江戸に於て旗下の若者、夜々辻切に出候故、往還の煩ワザワザの由なれば、鎮めて

參るべしと、被申渡ければ、奉畏候とて、早々江戸へ罷下り、御老中へ廻り、仰せの趣申渡儀有之候間、明日御登城有べく候、御旗本十六歳以上、男子、御目見致したるも致さざるも、其支配頭召連可致、登城旨、御觸可有之と申達す、翌日御旗本不殘登城の時、件シケンの鷹匠上座に居り申けるは、仰せには、何れも御留守に差置かれ候は、御用心向の思召候處、如何仕腰のぬけ候哉、急度申譯可仕、某に承り届け可參との仰せオホセに候間、何分にも可被申上と申ければ、年寄中も如何様成事に可罷成哉と、末座の面々も目と目を見合せたる處に、大久保彦左衛門申けるは、殿様には何事を御聞き左様のひが事を被仰候哉、合點參らず候由申ければ、かの鷹匠申は、御用心向と思召候て、武勇の者共を差置かれ候處、夜々あふれ者ども江戸中を徘徊し、辻切を致すが故に、夜

は往來留まり候様に聞召キコシメ及ばれ候、然るに一人も討留たりと申儀、御聞に達せず、左候得ば、あばれ者に恐れ、夜は戸を閉ちかがみ込みて罷在るにて可有之と思召し候に付、右の御不審被仰下候と申達しければ、何れも目と目を見合せたる計にて、一言申者無之處、彦左衛門罷出で、何れも箇様の所へ少しも心付き申さず、油斷仕候、仰せの段、至極迷惑仕候、今宵より若者共に申付、心懸させ、左様のあばれ者候は、急度討留申べし、何れも奉誤候段、何分にも可然御請奉願候、何れも存寄は無之哉と、一座へ向ひつゝ、申ければ、満座一同に、彦左衛門申上候通り奉誤候、何分にもよろしく御請奉願候由申上げ退出す、其夜より切手共が互タガヒに心懸、外を制しける故、終に辻切止み、靜謐に相成たり、此鷹匠は、後に本多佐渡守とて、名臣と被呼けり、不善者吾亦

善之徳善なりとは、かゝることなるべし、

五十章

〔章意〕 この章、人無欲なれば、柔弱にして物に逆はず、その身を全うす、身を亡ぼすに至るは、欲より起る、古の聖人は、無欲故に、よく身を全うし玉ふことを云なり、

出生入死。

〔解義〕 夏の蟲の飛でみづから火に入るに異ならず、人々生地を出で、死地に入るものなり、

生之徒。十有三。死之徒。十有三。

〔字訓〕 生之徒。死之徒。極難解。七十六章に云、堅強者。死之徒。柔弱

者。生之徒。今これによりて解す、生之徒とは、命を保つ方のことと云如し、死之徒とは、命を喪ふ方のこと、云如し、十有三、この語尤難解、今姑王註に従ひこれを解す、十有五といはずして、十有三と云、これ解し難き所以なり、

〔解義〕 それもと人の世に處は、柔にして物に逆はず、その身を保つことを得べき類のこと、十の中に三分あり、又強くして物に逆ひ、その身を喪ぼしその命を殞すべき類のこと、十の中に三分あり、これ生べき方のこと三分、死すべき方のこと三分にして、生と死と相半ばし、半死半生とも云べく、素より危きその身なり、

人之生。動之死地。十有三。

〔解義〕 然るに人のものに心得なく、強きはいとゞつよく、逆ふはいとゞ逆ひ、動て死地にゆき、身を喪ぼし命を殞すべきこと、十の中に三分あり、されば生は三分死は六分にして、危はいよゝゝ危く、更に生すべき道なきなり、

夫何故。以其生生之厚。

〔字訓〕 生生は、養身を云なり、

〔解義〕 それ人身を惜み命を愛まぬ者はなし、何故にみづから死地に陥る如此なりや、その身を養ふ心厚くして、富貴榮耀を求むる慾にくらみ、斯く強くして物に逆ひ、死地に陥るに至るなり、

蓋聞善攝生者。陸行不遇兕虎。入軍不被甲兵。兕無所投。

其角。虎無所措其爪。兵無所容其刃。夫何故。以其無死地。

〔字訓〕 攝生は、身を保つを云なり、兕は野牛と云、甲兵、甲は帯けて云までなり、兵の字主なり、この類書中に多し、

〔解義〕 蓋聞く、善く身を保つ者は、陸を行けども兕虎の禍に遇はず、軍に入れども甲兵の害を被らず、それその鋭き兕も、その角を觸れやうなく、猛き虎も、その爪を措きやうなく、利兵も、その刃の容れやうなきなり、そは何故に如此なるや、其人慾に動くことなく、柔にして物に逆はず、危き死地なき人なるが故なり、されば無慾れば身を保つ、有慾ば身を喪ふ、その理明白なること如此、身を思ふは身を思はざるなり、何ぞ慾を寡くせざるや、

〔餘論〕 無住國師の砂石集に、この章を引て曰、老子云、道徳ある人は、兕虎も爪をさしおく所なく、甲兵も刃を接ふる所なしと、その意は、大道を心に修め、妄念なく、身に死地なき者は、殺すべき所なきが故なり、此故に魔にとらるゝは、まづこゝろ魔となり、佛に度せらるゝは、まづこゝろ佛となる、憍慢即魔也、菩提心即佛也、大般若の意は、般若を念するものは、軍に入るに刀杖身を犯さず、その故は般若は無相平等の智より、同體無縁の慈悲を興す、故に身に貪瞋愚癡等の兵杖なし、この故に敵おのづから慈悲を興し、こはき物おのれと損し落ちうせる由を説かれたり、薪を焚くに木の中の火起て後、外の火は附くなり、生木は中の火起ること遅し、故に火のもゆること遅し、すべて心より萬事起て後、外の縁は來るなり、この章今解して、もと我より物

を犯さざれば、物も亦我を害せざるの義とす、然るに砂石集の説は、外の害は内心より起るとす、その説一層を深くす、果して老子の意に當るや否やを知らず、高僧の説、姑くこれを附録するのみ、

五十一章

〔章意〕 この章、道德は萬物の本たり、人よくこの大道を身に體し、至徳に至るべしといへるなり、

道生之。徳畜之。物形之。勢成之。

〔字訓〕 徳とは萬物の性をさして云なり、水の潤し火の燃ゆる如きを云なり、畜とは萬物各一徳づゝをもちたくはふるを云

なり、物形之とは、萬物それくくの形となるを云なり、此の說王註によらず、勢成之とは、譬へば筍の一度に二丈三丈をだつ如きを勢と云、もし筍長さかりに壓し止めおき、時過ぐれば勢収けてそのまま枯るゝものなり、故に勢にて成ると云なり、成はでき上るなり、

〔解義〕 凡そ萬物は道より生じ、各く一徳をもち畜へ、それくの物の形となり、勢にてできあがるなり、以上本文を略解し、以下再び委しく、その道は無なるものなり、萬物の始まりは、みな無より生ず、譬へば水に子々の生ずる如し、これを道生之と云なり、これ氣にてひとり、これを氣化と云、萬物の始まり、みな如此、さてその子々の交、さてその生じたる物は、接して子を生ず、これを形化と云、このこと易に出づ、燃ゆる徳をもつもあり、潤す徳をもつもあり、飛ぶ徳をもつもあり、遊ぶ徳をもつもあり、これを徳畜之と云なり、又その燃ゆ

る徳をもつものは、火の形となり、潤す徳をもつものは、水の形となり、飛ぶ徳をもつものは、鳥の形となり、遊ぶ徳をもつものは、魚の形となる、これを物形之と云なり、又その物の形微なるより始まりて、漸く大に至ること、全く勢によつてできるなり、これを勢成之と云なり、これ萬物生成の次第なり、

是以萬物莫不尊道而貴徳。

〔解義〕 それかくの如くなる故に、萬物の本づく所は、道と徳なり、是を以て萬物道を尊びて徳を貴ばざるものなし、

道之尊。徳之貴。夫莫之命常自然。

〔字訓〕 命は位を命じゆるすなり、

〔解義〕 五岳は視三公、四瀆は視諸侯ともありて、世に尊き神祇すら、位を命されていと尊しといへり、然るにたゞ道の尊き徳の貴きのみは、天地自然の理にて、人の爲す所にあらず、爵位を命ずることなくして尊きものなり、世に財を身にもてるを富人と云、然ればこの貴き道德を身にもたば、貴き人と云べきか、これ昔より道德ある人を貴ぶ故なるべし、

故道生之。徳畜之。長之育之。亭之毒之。養之覆之。

〔字訓〕 亭は品々にするなり、毒はをさめなすなり、覆はおほふ、庇を蒙らしむるなり、

〔解義〕 それこの故に、萬物は道より生じ、各々一徳づゝをもてるものなり、これを道生之徳畜之と云なり、さてその道といへ

るものは、萬物を長^ツ育て、譬へば麻は麻となり蓬^{トモギ}は蓬となりしむる、これを長^ツ之育^ム之と云なり、又その材^カ質^クを亭^{シヤク}に毒^{ドク}たて、麻は績^ウむべく、蓬は灸^{キウ}すべきものならしむ、これを亭^{シヤク}之毒^{ドク}之と云なり、又それをいよく、養^{ヤウ}ひ立て覆^{フク}ひたすけ、麻の直^{チキ}なるも蓬の横^{ヨコ}なるも、各その生^シを遂^スげ、その程^{ハジメ}々にそだておほせ、五月雨^{ウツ}の浸^{シメ}にも腐^{クサ}らず、六月の熱^{アツ}にも枯^カれず、これを養^{ヤウ}之覆^{フク}之と云なり、されば萬物始めて生^シずるより、すでに成^ナるに至^{いた}るまで、道の力^{チカラ}にあらざるなし、

生^シ而不^レ有^セ爲^レ而不^レ恃^セ。長^{シテ}而不^レ宰^セ。是^{ナリ}謂^フ玄^ノ德^{ナリ}。

〔解義〕 僅に恩を施して徳色面に現るゝも、淺^{アヤ}丈夫^{キヤウトウ}には常^{トコ}にある習^{ナリ}なり、いかなれば道はかくおくゆかしきものにありける、

それ道は、萬物その力にて生^シずれども、已^マ勞^{ラウ}ありとせず、生而不有の句をとりその力にてなり立てども、已^マ功^{コウ}ありとせず、爲而不恃の句をとりその力にて長^{シテ}ずれども、已^マ其^ノ主^ノとなり宰^{ツカサ}とならず、長而不宰の句をとりその徳ありて人知らず、これ深^コき玄^ノ德^{ナリ}と云べきなり、是謂玄徳の句をとり人もしくはこの道を會^エ得^{トク}して、人を濟^スふの徳ありて、人に驕^ウるの色なくば、亦玄^ノ德^{ナリ}と云べきか、昔舜^{シユン}を稱^{ホメ}して玄^ノ德^{ナリ}升^ノ聞^クと云、湯^{トウ}を稱^{ホメ}して玄^ノ王^ノ桓^{クワン}撥^{ハク}と云、亦その淺^{アヤ}からずおくゆかしきによりての稱^{ホメ}なるべし、

老子講義卷五

牧山佐藤先生著

辰巳 守

太田 元遵 同校

村瀬 緒

五十一章

〔章意〕 此章は、人心の欲を戒むるなり、無住國師曰、一切の境界は、我心によりて善惡あり、我心迷ふときは、塵々妄緣也、我心悟るときは、法々實相也と、これ佛家の説なり、然れども此章に所謂の終身不勤も、我心による、終身不救も、我心による、善も我心により惡も我心によるの趣は、同じかるべし、

天下有始。以爲天下母。

〔字訓〕 有始とは、道をさして云なり、母は養ひ育つるの意にと
る、

〔解義〕 そもく、天下に萬物を生じ始むる道と云ものあり、猶
又萬物の母となり、養ひ立て、それく、に成就せしめ、花は花
となり、鳥は鳥となり、魚は魚とならしむるなり、

既知其母。復知其子。既知其子。復守其母。沒其不殆。

〔字訓〕 母とは道のことなり、子とは萬事有爲のことなり、知其
子とは、周易に所謂の智周萬物のことなり、その智慧萬事に明
るきなり、没はその身を終るなり、

〔解義〕 人々無爲なること能はず、有爲を好み事をなさんとす、

故に變故百出、やゝもすれば陷危地（以上）もしすでに無爲の道を
辨へ知りて、又萬事を辨へ（此）既知其母復（以上）すでに萬事辨へたれど
も、手を下さず、退て道を守りて無爲なれば、（此）既知其子復（以上）終身危
殆のことに値ふことなし、言は萬事を辨へざるは愚なり、辨へ
たりと云へども、それに手を下すは非なり、只辨へていながら
手を下さず、道を守りて無爲なるべきなり、

塞其兌。閉其門。終身不勤。

〔字訓〕 兌は詩經の註に成蹊也通也とありて、とほるなり、いき
抜けのみちなり、人の心は、欲の生ずること限りなく、いきぬけ
の如し、故に心のことを兌と云、門とは出づる口なり、心は欲の
出づる口なり、故に心のことを門と云、

〔解義〕 それ物は萬物と云、事は萬事と云、もとより物も限りなく、事も限りなし、然るに我人、その限りなき物、限りなき事の中に在りて、かの物に心迷ひ、この事に心牽かれ、欲の生ずること限りなく、いきぬけの如くなり、欲の出づること限りなく、打ち開けたる門の如くなり、以上發端たゞその兌の如く欲の生ずる心を塞ぎ、打ち開ける門の如く欲の出づる心を閉ちて欲を出さざれば、終身ほねのをれることはなかるべし、

開其兌。濟其事。終身不救。

〔解義〕 もしそのいき抜けなる心を塞がず、欲の生ずるまゝにして、一々濟しおほせんとせば、その欲ますます出で、救ひ止むべからざるなり、無住國師の曰、一生は盡くれども、希望は盡

きずと、このことなり、姑く一事を以て明せば、豊臣太閤匹夫より起り、すでに日本を掌握すれども猶足らず、位關白に陞れども猶足らず、終に朝鮮の役を興し、その身死して後、始めてその事止むが如きは、即このことなり、

見小曰明。守柔曰強。

〔字訓〕 小とは微小なり、かすかなるを云なり、事の未然を云なり、事の未然是、かすかなり、故に小と云なり、

〔解義〕 凡そ事すでに成就して顯然たる時に、その利害得失を見知るは、易きことなり、明と云に足らず、但我胸中に一念思ひ立ち、即欲たる時、この事利害得失いかゞあるべしと、早く見るを見小と云、これ心にかけくもりなきものにあらざれば、なら

ざることなり、此、見小曰明凡そ人強を守りて猛きは折れ易し、折れ易ければ強と云べからず、たゞ柔を守りて物にやはらかなれば、折るゝことなし、折るゝことなければ強と云べきなり、守柔曰強の一句をとり

用其光。復歸其明。無遺身殃。是謂習常。

〔字訓〕 光とは自然に出づる智慧のことなり、莊子に天光と云も、これに同じ、佛書に我性靈光とあるも、恐くはこれならんか、明は上文の見小曰明の明の字の義に同じ、明とは心の本體なり、復歸と云にて知るべし、復歸とは、もとのすがたにかへることにて、もとの明かなるにかへるなり、

〔解義〕 すべて人は私欲の爲めに心くらむ、故に利害得失を知

ること能はず、若し能く私欲にくらむことなくして、我が天然の智慧を用ゐ、我が心の昭々靈々たる本體の明にかへり、事に臨みて利害得失の見損じなく、我と我が身に殃を與ふることなき、これを常道を履み行ふと云なり、老子これを常道と云、されば知らでかなはざるの道なるべし、

五十三章

〔章意〕 この章は、無爲の道を行はざるの害をなげきたるなり、

使スレバ我ヲ介ス然レテ有ル知ル行ハ於テ大道。唯レ施テ是レ畏ル。

〔字訓〕 介然スレバはすこしなり、翼註に云、猶言微也、知は知州の知に

同じ心得司どるの意なり、施は仕向くるなり、
 [解義] 世間なみくくの治め方は、法度禁令、彼を施し此を施し、
 僅に下を維持し強制するのみ、これ眞の治め方ならず、以上も
 し我をして微しく天下のことを司どり、大道を行はしめば、我
 は只施し仕向くることを畏れてすまじきなり、天下を治むる
 は、只無爲の道を以てすべきのみ、
 一三二、九

大道甚夷而民好徑

[字訓] 徑はこみちなり、邪なることを云なり、

[解義] そもく、大道は甚平夷にして行きやすき道なるを、民
 人棄て由ずして、徒に邪なる徑を好み、もし又それが上に我
 より施し仕向くることあれば、水に水を益し、火に火を益すが

如くにて、民はいと邪になり、騒がしかるべし、むかし秦の時
 法令密にして、民益奸なりき、これこの言の明證なり、
 三二、一〇。

朝甚除。田甚蕪。倉甚虚。服文綵。帶利劍。厭飲食。財貨有餘。
 是謂盜夸。非道也哉。

[字訓] 朝は王註には、宮室と云へり、韓非の説は、聽訟の役所と
 す、今その説に従て解す、文は青赤色なり、綵は色絲なり、文綵は
 美服を云なり、厭は饜に同じ、

[解義] すべて人の通はぬ道は、自ら草生え茂り穢るゝことな
 り、聽訟の官府、草もなくして甚綺麗なるは、いよく邪徑をこ
 のみ、訟繁く人の通ふこと多ければなり、されば農事を勤むる
 暇なくして、田地甚蕪れ、倉廩甚虚しくして、國貧しかるべきな

り、それが中に在りて、民の上に立てる者、非義にして民の財を掠めとり、己一分の榮華を盡し、美服を服し、利劍を帶び、飲食に飽き、財貨に有餘て、その非なるを知らず、己富貴なりと人に驕り耀かすは、これを盜人の物もてりとして誇るに同じと謂ふべし、嗚呼非道也哉。

五十四章

〔章意〕この章は、すべて人はその家の長久なるを願はざるものなし、それにはたゞ尊き卑きの分ちなく、各その徳を失はず、その家職を墜すことなかるべきなり、これその家千萬世綿々として榮えゆくべきの道なることをのぶるなり。

善建者不拔。善抱者不脫。子孫以祭祀不輟。

〔字訓〕建抱二字、共に己の徳を保つことを云なり。

〔解義〕よそめたのしきは人心、他をみて己が天性をとり失ひ、武夫として縉紳の風をなし、士の天性を失ひ、農として武夫の風をなし、農の天性を失ふの類、特操なきもの、習にて、世に常にあることなり、以上然るに我爲我、汝爲汝、己一分の天性を善く建て、拔かず、善く抱りて脱さずして、士は恒に士となり、農は恒に農となり、各その家職を墜すことなければ、その家連綿、子孫たる者、祖先の祭祀を奉じて、絶ゆることなかるべし、豈めてたき道ならずや。

脩之於身。其徳乃眞。脩之於家。其徳乃餘。脩之於郷。其徳

乃長。脩之於邦。其德乃豐。脩之於天下。其德乃普。邦豐叶韻。一作國。漢人避高帝諱改。

〔字訓〕 之は徳をさして云なり、眞は偽ならず誠なるなり、脩は保の意なり、餘は有餘多きの意なり、長は即大の意なり、韻を叶故、如此字をかふるのみ、

〔解義〕 徳の貴き、いよく推し行へば、其效驗いよく廣くして無窮、されば我身之を持てば、我身天性を全うして、其徳乃偽なし、一家之を持てば、一家みな天性を全うして、其徳乃有餘て多きなり、一郷之を持てば、一郷みな其天性の如くにして、其徳乃長大なり、一國之を持てば、一國みな其天性を全うして、其徳乃豊博なり、天下之を持てば、天下皆其天性を全うして、其徳乃

普遍なり、其徳普遍なるに至れば、萬民各其所を得、其分願を遂げ、一の不善なるものなくして、天下平かなるべきなり、

故以身觀身。以家觀家。以郷觀郷。以邦觀邦。以天下觀天下。

〔解義〕 かるが故に、我身を矩として人の身を觀、我身天性を保てば徳全し、人の身も亦しかあるべきことを知るなり、我家を矩として人の家を觀、我郷を矩として人の郷を觀、我邦を矩として人の邦を觀、天下を矩として天下を觀るに、みな如此、

吾何以知天下然哉。以此。

〔解義〕 天下の人、千差萬別、同じからず、然るに何を以てか、その

天性を保てば、その徳の全きを知るや、これあたりの人に問ふに及ばず、たゞ我一身の上を觀て知ることなり、天下廣しと云へども、我一人の理に異ならず、

五十五章

〔章意〕 此章は、含徳の人は、欲なく求なし、故に諸の災害に値ふことなきを云、

含^レ徳^ヲ之^ノ厚^ニ。比^ス於^テ赤^キ子^ニ。

〔字訓〕 含徳は徳をつゝみて顯さざるなり、厚は至なり、比は同じきなり、赤子はをさなむなり、凡そ物の絶えてなきを赤と云、赤地赤貧の類、みな然り、幼稚の者は、絶えて智慮なし、故に赤子

と云なり、

〔解義〕 華は盛り月は隈なく、物のおくなく顯れたるは、このもしからぬことなり、ましてや人の徳は、あらはならぬこそ深遠なれ、^{以上}今もし徳をつゝみて顯さざるの至極すれば、智もななく慮もなく、赤子の求なく欲なきにひとしきなり、

蜂^ハ蠆^ト虺^ト蛇^ト不^レ螫^ス。猛^ノ獸^ハ不^レ據^ス。攫^ム鳥^ハ不^レ搏^ス。

〔字訓〕 據は爪にてつかむなり、搏は羽にてうつなり、攫鳥は鷲の類を云なり、

〔解義〕 そもく、人の害に遇ふは、多くは我より物を犯せばなり、今それ含徳の人、赤子にひとしくして、我に求め欲することなければ、その世を渉る、我より物を犯すことなし、毒蟲も我を

螫さず、猛獸も我をつかまらず、攫鳥も我を搏たずして、往處として安全ならざるなし、

骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而全作。精之至也。

〔字訓〕 牝牡の合は、男女の交と云如し、色欲を云なり、全作は全うして生長するなり、他本に峻作に作る、峻は赤子、陰也、色欲を知らずして陰起るの義とす、王註はこれに異なり、今王註に従て解す、精は物のまじりなきことなり、求欲の心のまじらざるなり、

〔解義〕 すべて剛強なるものは、その身體の屈伸すら自由ならざるに、赤子は骨弱くして筋柔なれば、その手の握ることも固きなり、又人の身を害するは、男女の欲より甚しきはなし、然る

に赤子はいまだ男女の道を知らず、國を傾け城を傾くるの色をみるとも、心を動かし身を害するの患なく、全うして生長するは、これその心、求欲の念の雜りなく、精一の至りなり、

終日號而不嗶。和之至也。

〔解義〕 又赤子は終日呱呱と號けども、聲の嗶ることなきは、これその内に喜怒の情なくして、その心和し、聲の出づるに任するが故なり、含徳の人、赤子にひとし、その心の和げるも、亦如此、これその諸の害にあはざる所以なり、

知和曰常。知常曰明。

〔字訓〕 知の字かるく看るべし、常はかはることなきなり、

〔解義〕 心に喜怒なく和げば、その心常かはることなきなり、譬へば天に浮雲なきが如し、天の體いつも同じくしてかはることなし、これを知和、曰常と云なり、又心かはることなければ、その心くもりなく明かなり、これを知常、曰明と云なり、

益生、曰祥。心使氣、曰強。物壯則老。謂之不道。不道早已。

〔字訓〕 生は孟子の生之謂生、莊子の養生主の生に同じ、いけるはたらきと訓ず、知覺運動のことなり、祥はきざしなり、吉凶共に云、こゝは凶の方に用ゐたり、氣は形氣とも云、形に屬するものなり、強はしふるなり、無理なるを云なり、

〔解義〕 すべて人の性は智も限りあり、能も限りあり、然るに智を増し能を益さんとして、身に稱はざる無理をすれば、これ性

命を傷ふなり、故にこれを祥と云なり、心にのぞみありて、それが爲に己が氣を勞し形を役ふ、これを強と云なり、物壯なれば長く保たず衰ふる者なり、されば壯を不道と云、不道は、速に己み滅ぶべきことなり、これ戒めざるべけんや、

五十六章

〔章意〕 この章は、人君南面の術をのぶるなり、下たるものは、その質ありのまゝにして、上の任用に供ふべきことなれども、上に立ち玉ふ人君は然らず、その徳なにと一端の露るゝ處なく、外より窺ひ測ること能はざるにあり、すべて聖賢の教は、毎に人君を旨としてのぶることは、下たる者は、あしきも害なしとするに非ず、國家の治亂、萬民の吉

凶は、人君一人による故、君だによければ、國安く民豊なり、これ下たる者の善は、その人一人の幸にとゞまるのみ、上の善は、廣く天下萬世に及ぶ、故に急務を先とし、人君を主として教をのぶるなり、

知者不言。言者不知。

〔字訓〕 言は教令なり、さしづなり、

〔解義〕 天地間の萬物、各天性自然あらざるなし、よく道を心得知る者は、萬物の天性に任せて、耕す者は耕さしめ、商ふものには商はしめ、我より教令はせざるなり、これを知者不言と云なり、これ孟子に所謂の大禹行其所、無事のことなり、王註に云、因自然也、ものごとをその分にすることなり、もし萬物の天性に

任せず、我意の如く、あらしめんとして教令する者は、よく道を心得知らざる者なり、これを言者不知と云なり、これ孟子に所謂の小知の者の惡むべきは、爲其鑿也と云のことなり、王註に云、造事端也、ものごと餘計のことをなすことなり、

塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。是謂玄同。

〔字訓〕 塞其兌、閉其門の二句、五十二章にては、解して欲心を止むるの義とす、この章は、智巧を棄つるの義とす、この説、碧虚註に本づき、欲心智巧ともに、かぎりなく出づるものなり、故に同じくこれを兌と云門と云なり、下の其の字、四章には人をさして云、この章は我をさして云、紛は絲の亂れたるなり、人のなすことのうるさく多端にして、簡易ならざるを云なり、光とは我賢カレシくきらく

するを云なり、塵とは世間なみの仕方を云なり、義みな四章に同じ、

〔解義〕 人の世にあるは、よく心すべきことなり、塞其兌て智を出さずして愚なるもの、如く、閉其門て巧を出さずして拙きもの、如くなり、挫其銳てするどからずして圭角なく、解其紛て煩しからず簡易にし、和其光て我賢をあらはさずして目立つことなく、同其塵して世につれ俗に隨て獨り異なることなきなり、これを玄同と云なり、玄同とは、道と默契するを云なり、

故不可得而親。不可得而疎。不可得而利。不可得而害。不可得而貴。不可得而賤。故爲天下貴。

〔解義〕 それ斯人は、其徳一法の顯れたる跡なく、外よりつけ入

るべき間隙なし、故に外よりこれを親しまんとすれども、親しむべからず、疎んぜんとすれども、疎んずべからず、利せんとすれども、利すべからず、害せんとすれども、害すべからず、貴くせんとすれども、貴くすべからず、賤しくせんとすれども、賤しくすべからず、莊子所謂物物而不物於物、人を役して人の役たらざるの人なり、故にこれを天下に貴き人と云なり、もし趙孟に貴くせられ、又趙孟に賤しくせられ、趙孟の心のまゝに自由にすべき人は、人の役にして天下の賤丈夫のみ、

五十七章

〔章意〕 この章は、天下國家を治むるは、清淨無爲を以てすべし、禮儀法度の末を恃むべからざることをのぶるなり、

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。吾何以知其然哉。以此。

〔字訓〕 正は禮儀法度のことなり、奇はいつはり計略のことなり、無事は即無爲のことなり、

〔解義〕 夫天下は神器、あつかひ難きものなれば、人君これを治むるに、よく心したまふべきことなり、夫禮義法度を嚴密にして、理窟づめて治むれば、誰一人否と云ものなし、これを以正治國と云なり、然るに世は人情時勢と云ことありて、理窟づめには行かぬものなり、賢を賢として色に易へよと云、理窟は至極したれども、華とまがふ姿を見て、俄にくむ心にもなり難きは、人情と云ものなり、君子喪を奪はるべからず禮記と云理

窟は至極したれども、公より忌解ぬれば、出で、世の務をなさで叶はぬは、時勢と云ものなり、然るに理窟のみを推し立つれば、その可に當らず、下の傷となること多く、つもりく、つひには一揆徒黨の賊民おこりて亂をなし、やがて兵を起し計略をめぐらし、これと打ち戦ふに至るなり、これを以奇用兵と云なり、これ國を治むることの下手なるなり、されば禮儀法度を恃にせず、清淨無爲を以て治むれば、已勞せず、下傷まず、天下の人心歸服して、天下を有つべし、黃帝堯舜は、垂衣裳、天下治、これを以無事取天下と云なり、あゝ吾いかゞして正の不可にして無事の可なるを知るや、たゞ此理を以てこれをはかり知るなり、これを吾何以知其然哉、以此と云なり、

天下多忌諱。而民彌貧。民多利器。國家滋昏。人多巧技。奇物滋起。巧技。王本作技。巧。韻不叶。恐誤。今改之。法令滋彰。盜賊多有。

〔字訓〕 忌諱はいみきらひ防禁のことなり、利器はするどき武器なり、昏は昏亂なり、巧技は細工巧者なり、

〔解義〕 夫天下を治むるに、防禁を立つることは、もと民の爲に立つるなり、然るに防禁多ければ、彼も防禁なり、此も防禁なり、とて、人々縛られたる如くにて、己々の心のまゝに稼ぎ世涉ることなりがたくして、民いよ／＼貧になるものなり、これを天下多忌諱、而民彌貧と云なり、夫弓矢を始めとして、すべてするどき兵器は、もと亂を防がん爲に作れるものなり、そのかみ神聖、始めて弧矢を以て天下を威し玉ひ、その後これに矛戟戈劍

を益して、五兵として事足れり、然るに後世に至り、次第に利器多くなり、亂を防ぐの具備はりて、世しづかなるべきに、人に利器多きに隨て、強暴いやまし、國家ます／＼昏く亂るゝなり、これを人多利器、國家滋昏と云なり、夫器物は、もと人の用をたさんが爲の具なり、そのかみ掘地爲臼、採木爲耒の世は、用物のみありぬべし、然るに後世に至り、民に細工巧者多くして、無用新奇の物、いよ／＼世に多くなるなり、これを民多巧技、奇物滋起と云なり、むかし周太保武王を戒めて、不貴異物、賤用物、財乃足と云へり、かゝる世に、奇物はなかるべし、夫法令は、もと人の奸詐を防ぎ、盜賊を止めんが爲の具なり、然るに法令いよ／＼彰にして多ければ、下民動けば、法にふれ令にさはり、無所措手足、つひに窮して、盜賊多く有るに至るなり、これを法令滋彰、盜賊

多有と云なり、むかしより法令のとゞきたるは、秦に如くはなし、棄灰を刑し、偶語オウゴを禁ずるに至れり、然るに其代いくほどなくして、天下盜賊蜂起し、咸陽の都も、楚人、一炬可憐焦土となれり、されば天下を治むるに、民を害せんと欲するものなし、民の爲にするの心は如才なけれども、其處置可に當らざれば、却て民の害となることみな然り、

故聖人云。我無爲モシテ而民自化。我好靜シテ而民自正。我無事ムシテ而民自富。我無欲ムシテ而民自樸。

〔解義〕 それ故に古聖人の教に曰、我智巧を出さずして無爲なれば、民自ら化して善なり、我躁がしくせずして靜なれば、民自ら正しきなり、我事を好まず無事を行へば、民自ら富めるなり、

我無欲にして世に求むることなければ、民自ら質朴なり、これ天下を治むる要道なり、然らば我智巧なれば、民惡ムシき者となり、無爲の反なり、我事を躁がしくすれば、民邪ムシなるものとなり、好靜の反なり、我事を好めば、民貧なる者となり、無事の反なり、我世に求むることあれば、民偽ある者となるなり、無欲の反なり、

〔餘論〕 この章三段に分つ、天下多忌諱の一段、末世の弊風を言ひ盡す、聖人云の一段、上古の善治をのぶ、老子に在りては、聞き慣れたる如くなれども、その言尤味あり、

五十八章

〔章意〕 此章は、無爲の治、和光の徳を述ぶるなり、一説に、亂世に身を保つツの法を教ふるなり、

其政悶悶。其民醇醇。其政察察。其民缺缺。

〔字訓〕悶々は無知貌、くらき意なり、察々の反對なり、林註に云、不作聰明也、かしてだてをせざるを云なり、醇々は手厚きなり、薄情ならざるを云なり、醇はこき酒のことなり、厚きを云なり、察々はこまかに明かなるなり、缺々は不足の貌、

〔解義〕夫國を治むるに、其政をなす己が聰明を不出、無爲にして目立つことなく、悶々が如くなれば、其民も薄情ならず、手厚き風儀となることなり、これを其政悶々其民醇々と云なり、又其政をなす苛察にして、こさがしく吟味つよければ、其民人氣あしくなりて、各不足の心になり、盜をするに至るなり、これを其政察々其民缺々と云なり、

禍兮福之所倚。福兮禍之所伏。孰知其極。其無正。

〔字訓〕倚は側により掛りてあることなり、伏は中にかくれてあることなり、正は政刑なり、前章に正を禮文法度と云に同じ、〔解義〕すべて世間のことは、晝は夜となり、寒は暑となり、反復相因て常ならざるは、天地自然の理なり、禍の側にすでに福のよりかゝり、禍も福となるものなり、福の中に禍の伏して居て、福も禍となるものなり、世の中はなにか常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬となる、古今集さればよきもよしとは定めがたし、あゝ誰か治國の至極を知らんや、政刑は治國の道具なり、かゝる道具せめにすることなからんのみ、

正復爲奇。善復爲妖。人之迷。其日固久。

〔字訓〕 奇はいつはり、妖はわざはひ、皆兵革をさして云なり、正はたゞし、善はよし、皆政刑をさして云なり、

〔解義〕 夫政刑は固より正しきものなり、善きものなり、これを以て國を治めば、治まりもしつべし、されども人情時勢にもとる所ありて、下の傷となることあるべければ、頓て下民不服の者出來て、兵革を用て之を伐ち平ぐることに至るべし、これ正と云も、かへつて奇となり、善と云も、かへつて妖となるなり、そもく、民人迷ふて、天地自然の理にくらく、正の奇となるを知らず、善の妖となるを知らざること、昨日今日に始まらず、天地開闢以來の迷也、さればこそ、いつの世も、政刑の察々たるをたのみにして、治を誤るもの多けれ、

是以聖人方而不割。廉而不劘。直而不肆。光而不耀。

〔字訓〕 方は四角なり、たゞしきことなり、割は削なり、いためるを云なり、廉は稜なり、たて分けありて貪らざるなり、劘は傷なり、そこなふなり、肆は伸なり、一ぱいにすることなり、

〔解義〕 夫無爲の益、有爲の害、判然たる如此、此故に聖人は、和光の徳を旨とし玉ひ、己方にして折りぬ正しけれども、人の正しからざるを咎めて、人をいたため玉はざるなり、己廉にしてたて分けあれども、人の分けなく貪るを責めて、人を傷ひ玉はざるなり、己直なれども、その直なるを肆へ顯して、人の曲れるを耻しめ玉はざるなり、己光あれども、その光を耀かして、人の塵たるを形し玉はざるなり、これその政の悶々たる所以なり、

〔餘論〕 其政悶々は、無爲の治なり、堯舜の世しかるべし、其政察は、有爲の治なり、五伯の時これなるべし、寛政中、白河の水清ければ魚すまず、濁る田沼の昔戀しきと云、落首ありし由、もしくは察々の意あるか、

五十九章

〔章意〕 此章は、國を治め身を保ち、ともに長久なるべきの道をのぶ、是を内聖外王の道とす、此章刑名家兵學家養生家等、諸流の本づく所なり、

治人事天莫若嗇。

〔字訓〕 治人は百姓を安んずるなり、事天は天意に背かざるな

り、嗇は王註に農夫のこと、し曰、農夫之治田、務去其殊類、全其自然、田を作るものは、專、苗の害となるべき草を去り、苗の自然を全うせしむ、國を治むるも、人の害となるべき惡人を去り、人の天性を全うせしむべきなりと、其旨尙書などに云へる圯族、善類の害となるものを去ると云に合ふ、その説治國に切なり、然れども深根固柢等の語を味へば、恐くはその義にあらず、故に今他の説に従ふ、他の説は、韓非子以下諸家、みな嗇はをしむの義とす、然れども、財を吝嗇にあらず、己が精神氣力ををしむ、衰耗せしめざるを嗇と云、これ養生家の説なり、又曰、其機を歛藏す、これ刑名家兵學家の用ゐる所の説なり、今養生家の説に従て解く、

〔解義〕 それ國を有ち、下百姓を安んじ、上天意に背かざらんに

は、嗇なるにしくはなし、嗇とは無知無欲にして、精神を勞することなく、氣力を耗すことなきなり、

夫唯嗇。是謂早服。早服謂之重積德。

〔解義〕 すべて世の人、血氣壯なる時は、修養に心なし、年若い身衰へ、精神氣力乏きに至て、始めて心づき、修養せんとするは、遅きなり、發端上夫唯よく精神氣力を嗇み、血氣壯なる時に、修養を服行す、これを服行するの早と謂ふなり、服行すること早ければ、次第にその身に徳つもる、これを重積徳と謂ふなり、

重積徳則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極可以有國。有國之母可以長久。

〔字訓〕 克はよくするなり、極は際限なり、母は本なり、重積徳を云、

〔解義〕 重積徳の人は、民を安んじ天に事ふる、すべて無所不克なり、無所不克ければ、其作用の際限を知ることなし、其作用の際限を知ることなければ、よく國を有ち得べきなり、をもく國を有ち得べきの本は、重積徳なり、この本だにあれば、以てその國長久に榮ゆべきなり、

是謂深根固柢。長生久視之道。

〔字訓〕 根は横にさす根なり、柢は豎なる根なり、草木には必この二色の根ありて、その力にて枯れ倒れざるなり、久視は久しくながめてをることなり、老眼などは、久しく視れば眼疲る、精

神全き人は、眼氣強くして、久しく視つむれども眼疲れざるなり、久視は精神全きの驗なり、故に是を擧げて云、一説に、久視は世を久しく視るなり、只是長生の義、

〔解義〕 夫樹木の不枯不倒榮ゆるは、その根柢深く固く土にさし入ればなり、人よく精神氣力を全うするを、これを一身の根を深くし柢を固くすと謂ふなり、これを其身を保ち得て長く生ながらへ、眼力つよく久しく視ることを得て、性命長きの道なる、夫齋の貴き國を保ち、兼ては身を保つべし、

〔餘論〕 朱子曰、治人事天、莫若齋。夫唯齋。是謂早服。説き得て曲に盡せり、修養家の如き、其身いまだ損失せざるときに齋み養ふ、これを早服と云、如某は此身すでに衰ふ破屋の如し、西より扶くれば東に倒る、修養の加へ方もなし、又曰、齋は只是少しく用

ゐんことを要すと、蓋言語を少くし、飲食を少くし、思慮を少くし、眠睡を少くし、色欲を少くするの類なるべし、このこと養生の書に恒に云へり、朱子大賢猶遲かりしと云、早服字宜玩味、

六十章

〔章意〕 此章言は人君無爲の徳を身に備へて、無爲の道を以て天下を治め玉へば、天下の人皆無爲にして、その天性を守り、非分のことをなすものなく、風俗淳厚にして、天地鬼神も災害を降すことなく、聖人君上も、威刑を用ゐるに及ばず、是れ誠に治の極なり、眼目首の二句にあり、尤名言とす、

治大國若烹小鮮

〔字訓〕 小鮮は小魚なり、如烹小鮮、王註に云、不擾也と、尤妙、不擾とは、かきまはさざるを云なり、

〔解義〕 それ小魚を烹るもの、擾せばみな碎く、故に擾さずしてそつと烹ることなり、大國を治むるも、擾せば碎くるなり、故に小魚を烹る如く、擾さずそつと治むることなり、

以道蒞天下。其鬼不神。

大六十二
十一日十四

〔字訓〕 蒞は上より下に向て治むるを云なり、鬼はかみなり、分ちを云へば、天神地祇人鬼と云、皆神なり、天地人について、文字をかへたるのみ、不神の神は、たゞりのことなり、

〔解義〕 凡そ人罪惡あれば、鬼神災を降し、君上刑を施して罰し玉ふことなり、然るに、聖人無爲の道を以て天下を治め玉ふと

きは、天下の萬民も同じく無爲にして、無欲なるものとなり、罪惡なし、故に人鬼も神をなし玉ふことなきなり、

非其鬼不神。其神不傷人。

〔解義〕 唯人鬼の神をなし玉ふことなきのみならず、天神もとがめ災して人を傷ひ玉ふことなきなり、

非其神不傷人。聖人亦不傷人。

〔解義〕 唯天神のとがめて災害を降し人を傷ひ玉ふことなきのみならず、聖人もたゞしとがめて人を傷ひ玉ふことなきなり、

夫兩不相傷。故德交歸焉。

〔字訓〕 兩とは鬼神も聖人もなり、徳とは人君の徳なり、交とは天下の人の交歸服するなり、

〔解義〕 それこの天地は、幽には鬼神あり、明には聖人ありて、罪人悪人を罰し玉ふことなり、然るに今人みな無欲なるものとなりて、世に罰し玉ふべき罪人もなく、悪人もなければ、鬼神もたゞらず、聖人もとがめず、鬼神聖人兩ながら人を傷ひ玉ふことなく、天下の萬民、心泰身安、養老慈幼、各その一生をやすくすむすなり、これ皆人君無爲の徳より出づることなり、故に天下の人交歸服するなり、

六十一章

〔章意〕 此章隣國に交はるの道を示す、言は大國なりとて

人に高ぶり無禮なれば、人の服せぬものなり、卑下して下人の道を以て交はれば、人々悦び服して、天下を保つに至るなり、孟子曰、以大事小者、保天下、其意或は相近し、

大國者下流。

〔解義〕 それ小國は固より人に下るべきものなれば、人に下り高ぶらざれども、さしててきはなることなし、たゞ大國にして人に高ぶらざるは、格別のことにて、人の感服すること、水の下きに流るゝが如くなり、

天下之交、天下之牝。

〔字訓〕 牝牡は獸のめをなり、雌雄は鳥のめをなり、王註は牝牡

を鳥のこととなして解す、今この説に従ふ、雌は静にして隨ふの意にとる、

〔解義〕 天下の人々感服してつどひ集るは、たゞ我天下の牝たればなり、それ我威勝にして躁がしく人を相手とるときは、敵をまねき敗はとるとも、服するものなきは、これ天下の牡となればなり、たゞ我静にして人を相手とることなきを、天下の牝となると云なり、

牝常以静勝牡。以静爲下。

〔解義〕 そもそも雌は常に静にして躁がしからざるを以て、雄に勝て自由に引きまはすものなり、今大國も静にして躁がしからず、しかも人に下りて高ぶらざるを以て、天下の人交服するに至るなり、

るに至るなり、

故大國以下小國。則取小國。

〔字訓〕 取は奪ひとるにあらず、なづけ従へることなり、

〔解義〕 かるが故に大國手をさげて人に下れば、小國その徳に感服して、小國をなづけ従へることを得るなり、

小國以下大國。則取大國。

〔字訓〕 取大國、この取の字は、うけ入れらるゝなり、棄てられずのけものにせられざるを云なり、

〔解義〕 小國手を下げ人に下れば、大國に棄てられず、その庇にて安く全きことを得るなり、

故或下以取。或下而取。

〔解義〕 それかるが故に、或は人に下れば、人をなづけ従へ、或は人に下れば、人に棄てられず安きことを得る、いづれも人に下りてその望の如くなりて、その所を得ることなり。

大國不過欲兼畜人。小國不過欲入事人。

〔字訓〕 兼畜は、皆したるがへることなり。

〔解義〕 そもく大國は隣國其外までも、人をみな兼ね従へんと欲するのみ、小國は大國に従ひ事人、その庇にて安くゆかんと欲するのみ。

夫兩者各得其所欲。大者宜爲下。

〔解義〕 それ大國小國ともに人に下れば、各其欲する所を得て、本意を遂ぐることなれども、小國はわづかに其國を全うするのみ、大國は天下をも従へつべきなり、されば大國はとり分け人に下るべきことなり。

六十一章

〔章意〕 此章は、道は善人の爲にもなり、不善人の爲にもなりて、重寶なるものなるを云なり。

道者萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。

〔字訓〕 奥は暖なり、萬物は皆天地の氣の暖にて生育するものなり、故に奥とは生育のもと、云ふ意にとり用ゐたり、保はたもちたすけらるゝ意なり。

〔解義〕 それ道は、萬物の生育するものとなり、善人の寶となりて用をなすものなり、不善人の庇を蒙りて全うゆくものなり、

美言可以市。尊行可以加人。

〔字訓〕 市はうることなり、加人は人の上にたつなり、

〔解義〕 さてその道は、ほめたつれば高き價にも市ひつべく、尊び行へば人のかみとなるべきなり、易に謙は尊而光と云も、この意なり、

人之不善。何棄之有。故立天子。置三公。

〔解義〕 凡そ人の不善なるは、道を知らざればなり、もし道を心得て無爲なるものとならば、不善は消えはてつべきことなり、

以上 されば人は不善なりとて、何の棄つることあらん、たゞ道を心得しめんのみ、故に天より世に天子と云ものを立て、三公と云ものを置き玉ひて、道をさとさしめ、不善なる人をたすけしめ玉ふなり、

雖有拱璧以先駟馬。不如坐進此道。

〔字訓〕 拱は兩手にて握ることなり、拱璧は大なる玉なり、駟馬は四匹の馬なり、古は進物を出すに、先づ一品さきに出し、又一品はそれに次で出すことなり、故に拱璧先駟馬と云なり、拱璧駟馬は重き進物なり、

〔解義〕 大なる璧を駟馬に先だて、特に手重なる享物を進むるより、坐して此道を進むるにしかず、いかなる寶にもまさる

ものは、此道なり、

古之所以貴此道者、何也。不曰以求得、有罪以免耶。故爲天下貴。

〔解義〕 さて古の此道を貴ぶ所以は、何故ぞや、それ此道は、求むるあればその求むることを得べく、罪あれば罪を免るべきものと曰ふにあらずや、かゝる大益のあるものなり、故に天下に並びなく貴きものとせらるゝなり、問て曰、以求得とは、如何なることなりや、答て曰、凡そ事をなすに、有爲にして術數權謀にて求むれば、その事敗れてならず、たゞ清淨無爲なれば、全うして成る、これ道を以て求むれば得ることなり、上文に云、善人之寶なりとは、このことなり、又問て曰、有罪以免とは、いかなる

ことなりや、答て曰、有爲にして事を處するが故に、すまじきことをもなして有罪なり、たゞ清淨無爲なるべしとき、て、手を引き事を止むれば、罪は消ゆべし、これ有罪以免、ことを得るなり、上文に云、不善人之所保なりとは、このことなり、

六十三章

〔章意〕 此章は、聖人天下の難事をよく處し、天下の大事をよく爲し玉ふの妙用あることを云へり、それ躁がしきものは、常に事を誤る、聖人は唯其恬淡なり、故によく事の機會をばづし玉ふことなくして、よく如此、

爲無爲、事無事、味無味。

〔解義〕 物の自然に任せて智巧をいゝなきを、爲無爲と云な

り、當然なることをなして細工を用ゐることなきを、事無事、と云なり、譬へば水は下へ流るゝものなり、たゞ其塞へたるを去りて、下に流るゝやうにする如きを云なり、道は淡しきものにして、そよときゝて人の悦び飛び立つばかりに思ふ如き、功名利欲の濃なる處なきものにて、無味が如きものなり、その佳處を心得るを、味無味、と云なり、小人甘以敗とは、濃なるが故なり、

大小多少。報怨以德。

〔解義〕 凡そ人の忘れがたきは、怨なり、身を棄て報ゆるもあり、家を亡ぼして報ゆるもあり、さりながら我より報い、彼より報い、むくいゝて止む時なく、ともに心安からぬ一生を過すに至るなり、されば大怨小怨、多怨少怨の分ちなく、怨を報するに

恩を以てして、怨を消して心安き世を過すこそ、上なる仕方なれ、

圖、難於其易。爲大於其細。

〔解義〕 難事となるべきことは、いまだ其易きうちに取り治むべきなり、大事となるべきことは、いまだ其細なるうちに處置すべきなり、

天下難事。必作於易。天下大事。必作於細。

〔解義〕 そもく、天下の難事は、始より難事にあらず、必易きことより起て、難事となるものなり、天下の大事は、始より大事にあらず、必細事より起て、大事となるものなり、さればその始の易き時、細なる時に、取り治めやすく、處置しやすき機會あるも

のなり、

是以聖人終不爲大。故能成其大。

〔字訓〕 爲はいたすなり、はからふなり、成はできあがるなり、成就するなり、

〔解義〕 是を以て聖人終に大事に手を下し玉ふことなく、その小事のうち、みな處置し玉ふことなり、故に能く大事を成就し玉ふなり、そもく、聖人は聰明叡智、見機の明にして、従事の敏なり、故によく如此なり、

夫輕諾、必寡信。多易、必多難。

〔字訓〕 多易とは、事を多く容易に心得るなり、

〔解義〕 すべて人の頼みを輕しく請け合ふものは、必信寡くして、その言たがふものなり、事に當て容易に心得て大じにせざるものは、必難多くして、終に困むものなり、

是以聖人猶難之。故終無難矣。

〔解義〕 是を以て聖人の徳あり才あるすら、猶事を易しとし玉はずして、難しとし大じにし玉ふなり、故にそのこと易く濟みて終無難ものなり、これよく思ひ辨へて法となすべきことなり、

〔餘論〕 論語に、或人の以德報怨の問に、孔子答て、然らば何以報徳、徳の報いやうなかるべしとの玉ふを以て、諸家老子の解に、同護多し、然れどもこれ必しも泥むべからず、禮記に孔子の語

なりとてのせたるあり、其語に曰、以德報怨。寬身之仁也。以怨報德。刑戮之民也。傳に曰、言豈一端哉。其各有所當。然ればあし、との玉ふも、よしとの玉ふも、各その趣意あることなり、たゞ其意をよく會得するにあるべし、東照公嘗謂待臣曰、我天下を取りたるは、只一言の益なり、汝等當て見よと、因て學問ある人々、經書の語を引き、これかそれかと申上るに、それでもなし、これでもなし、報怨以恩と云語なり、只此一言、當家の運を開けりと申されたりと、或人問て曰、君父の讎はいかん、答て曰、君父の讎は、禮記にも不共戴天之讎と云へり、これは讎と云ものにて、怨とは云はず、怨とは人より我に非理なる仕向けありて、にくしと思ふことを云なり、古聖人いかにかんべんあつしと云へども、君父の讎に恩を以て報すべしと云へることにてはあるべ

からず、

六十四章

〔章意〕 此章、聖人の妙用、天下のこと、その始の爲し易き時に處置して、難事に逢ひ玉ふなく、其終り忽になり易きを、慎み玉ひて、敗事あることなきを云なり、

其安易持。其未兆易謀。其脆易泮。其微易散。謀與持叶韻。微古音。謀根。微等字同。今不可。

〔解義〕 それ已に勢危くなりたるは、持ちがたけれども、其安き時に持てば、持ちやすし、已に事生じたるは、謀り難けれども、其未兆ときに謀れば、謀りて消しやすし、已に堅くなりたるは、泮

けしめ難けれども、其脆き時に泮ければ、泮けしめ易し、已にあらはになりたるは、散じ難けれども、其微なる時に散せば、散じやすし、

爲之於未有。治之於未亂。

〔解義〕 然れば舉事貴早、禍亂は未有の時に早く處置して、終にあらしめず、家國は未亂の時に早く取り治めて、終に亂れざらしむるなり、

合抱之木。生於毫末。九層之臺。起於累土。千里之行。始於足下。

〔解義〕 凡そ天下のこと、其始はみな微細なるものにて、處置し

易し、一抱なる大木も、其始は毫末ほどの苗より生じ、九重なる高臺も、その始は僅に一簣の土を累ぬるより起り、千里の旅行も、その始は足下の一步より始まるなり、

爲者敗之。執者失之。

〔字訓〕 爲とは心を用ゐる力を入れてなすことなり、執とは固く我意の如くならしめて動かさざるを云なり、

〔解義〕 然るにその始微細にして處置しやすき機會をばづし、すでに大になりたる上にて手を下し、心を用ゐる力を入れて爲す者は、事を敗るものなり、己が意の如くならしめんとして固く執り泥む者は、事を失ふものなり、

是以聖人無爲故無敗。無執故無失。

〔解義〕 是を以て聖人はその易き時に早く處置し了りて、心を用ゐる力を入れて爲すことなし、故に敗るゝことなきなり、己が意を立て執り泥むことなし、故に失ひ玉ふことなきものなり、民之從事。常於幾成而敗之。慎終如始。則無敗事。

〔解義〕 凡そ民の從事、その事幾んど成就せんとするころに至り、心ゆるみて其事敗るゝものなり、慎終如始して、始めより終りに至るまで、戦々兢兢々、油断せざれば、敗事なし、周易に、水を汲むもの、ほとんど水至らんとして、其瓶をやぶる、凶とあり、又小學書に所載、官怠於宦成、病加於少愈、禍生於懈惰、と云の類、皆慎終の戒なり。

是以聖人欲不欲。不貴難得之貨。學不學。復衆人之所過。

〔解義〕 是を以て聖人は外物を不欲ことを欲して、難得ところの貨を貴ばず、他人を不學ことを學んで、衆人の天性に過ぎたるを引き復して、天性にをらしむるなり。

以輔萬物之自然。而不敢爲。

〔解義〕 されば聖人は萬物の自然を輔けて、花さくものは花さき、實のるものは實のり、農は農となり、工は工となり、各その天性自然を遂げしめ玉ひて、萬物敢てその天性の外なることをせざる様になることなり。

老子講義卷五の本文。右頁には「以道莅天下者其鬼不神」の章の解説が、左頁には「以道莅天下者其鬼不神」の章の解説が、それぞれ縦書きで記述されている。

老子講義卷六

收山佐藤先生著

高橋磯八郎
石橋 尙寶 同校
陸 鉞 巖

六十五章

〔章意〕 此章、古の聖人國を治むる、朴實を以て要とし玉へり、されば智術を以て動かすべからざることを云なり、

古之善爲道者。非以明民。將以愚之。

〔解義〕 古の清淨無爲の道を爲し行ふ者は、民をして才智ありてかしてからしめんとするに非ず、まさに以て民をして有り

つる才智もかくれておろかならしめんとするなり、そはかしこきは巧詐多く、おろかなるは無智無欲にして、自然の性に順へばなり、

民之難治。以其智多。

〔解義〕 民の治めがたきは、その猿智慧多くして、巧み詐るを以てなり、

政以智治。國之賊。

〔字訓〕 賊は害なり、

〔解義〕 この故に上より智を以て仕向け玉へば、民亦智を以てこれに應じ、思惟いよく密にして、巧詐ますく長じ、國騒が

しく終には亂に至ることなり、故に曰、以智治國國之賊なり、
不以智治國國之福。

〔解義〕 上より智巧を以てせず、そつと靜なる仕向けをなし玉へば、民亦騒がしからずして、上安く下泰なり、故に曰、不以智治國國之福なり、

知此兩者、亦稽式。

〔字訓〕 稽は同じきなり、

〔解義〕 此兩端を心得るは、天下古今の定規なり、

常知稽式。是謂玄德。

〔解義〕 常にこの天下古今の定規を心得たるを、これを玄德と

云なり。

玄德深矣遠矣。與物反矣。然後乃至大順。

〔解義〕 それ玄德は深くして淺はかならず、遠くして近からざるものなり、そもくその玄德の人は、天下の人と共々に、その天性の自然に反り、己々のなし得るさまくをなして、天下大順に至るなり、以上本文を説きた大順とは、一通り治まると云よりも、はるかに大なることなり、我性分を盡し、人の性分を盡さしめ、禽獸草木の性を盡し、天地の化育を助け、人物各其生を遂げ、其所を得、無爲にして無事なるを、大順と云なり、鑿井而飲、畊田而食、帝力何有於我哉、と云へるが如きは、大順の至なり、

〔餘論〕 熊澤了介曰、老子民を愚癡にして頑妄ならしめんと思

へるに非ず、世間機巧の智、利害の謀は、萬惡の源なれば、この源を塞がんとするなり、機巧利害の智を尊ぶ者の目には、無欲正直の人をば愚なりと思へり、誠の道に明かなる者は、おのづから謀計邪偽に拙し、世の教ふる者、人をして徳に入らしむること能はずして、才智を長ぜんとす、誠を思はしめずして、機智を開かんとす、是れ世の明かにすると云は、偽に近し、故に老子歎きてしか云へり、徳は拙に似て愚なるが如し、愚にせんとするは徳に近付かしめんとなり、

六十六章

〔章意〕 此章は、人君無我的謙徳あれば、天下歸服すること、水の下に就くが如くなるを云なり、

江海所以能爲百谷王者。以其善下之。故能爲百谷王。

〔解義〕 人に有りたきは無我の徳なり、それ江海は大にして王の如く、百の谷川は小にして臣の如し、もし江海高き處にあらば、百の谷川の水はあつまるまじきなり、江海の大にして能く百の谷川の王たる所以は、江海は高きに居らずして、善く下りて卑きが故に、百の谷川の水落ちこみて、さしもにひろき大江大海となりて、百の谷川の王となるなり、これ謙徳の貴きをみるべし、

是以聖人欲上民。必以言下之。欲先民。必以身後之。

〔解義〕 それ謙徳の貴き如此、是を以て聖人は、民に上たらんとすれば、必以言下之、みづから孤寡不穀、吾身はよからぬものと爲、民の爲をはかり玉ふなり、

是以聖人處上而民不重。處前而民不害。

〔解義〕 凡そ高ぶるものはにくみ、驕るものはきらふ、人情の常なり、然るに聖人はそれかく謙り玉ふ、是を以て民の上居玉へども、民うつとせせず、民の前に居玉へども、民害とせざるなり、

是以天下樂推而不厭。以其不爭。故天下莫能與之爭。

〔解義〕 それかく謙り玉ふ、是を以て天下の人打ち擧りて、聖人を悦び樂みて推し崇め、いつまでも厭ひあくことなし、をもそ

も聖人の推し崇められて上にましますは、上に居らんとして人と争ひ玉ふにあらず、故に天下の人誰一人能く聖人にはり合ひ争ふものなくして、皆下となりて服するなり、以上本文中府曰、日月所照、霜露所墜のかぎりは、尊親せざるものなしと、かゝる聖人のことを云なるべし、

〔餘論〕 此章專謙徳の尊きを示し、謙徳あれば、天下の人推し崇めて厭ふことなしと云へり、然れば謙徳なければ、天下の人推し崇むることを樂まず、厭ひいやがることを知るべし、熊澤了介曰、以言下之、是亦謙徳なり、このこと古今に涉り考ふれば、僅に一句なれども、係る所尤大なり、昔漢の武帝、連年胡を伐ち、天下疲弊に堪へずして、大亂とならんとする折柄、始めて心付き、輪臺に於て詔を作り、前非を悔いて、つけ諭トクされれば、天下の

人感泣せざるものなく、此一詔によりて、天下の人心の離れたるを引戻して、天下亂とならざりしと云へり、又唐の徳宗の時、天下亂れ、人心離る、その臣陸贄申けるは、徳を以て人を感ずること能はざれば、せめては言を以て動かすべしとて、力を奮ひ詔を作りて、天下につげ諭せしかば、是亦天下の人感泣して、終に徳宗をたすけ、その勢を立直タナホせり、これみな僅に一言にて、すでに亂亡に及ばんとする天下の大勢を挽回せり、以言下之の金言、其效如此、昔豊臣太閤、明智光秀と、山崎に於て合戦あり、その戦に勝ちて、駕籠にて歸りさまに、駕籠の中より、瀬兵大儀と聲をかけられしを、中川瀬兵衛不禮をいきどほれりと云へり、人の心はあつかひよく、又あつかひにくきものなり、今もし百金を與へんに、その恩は悦ぶべけれども、それが爲にとて命は

すてず、たゞ一言のありがたきには、命もすつるは人の情なり、これ古聖賢の言を重んじ玉ふ所以なり、

六十七章

〔章意〕 此章三寶の貴きを明す、先儒の説に、老子一部の第一切要の章なりと云へり、

天下皆謂我道大似不肖。夫唯大故似不肖。若肖。久矣其細也夫。

〔字訓〕 我とは老子自ら謂ふなり、不肖とは、古人の註に、不肖父と云ことなりと云、然れどもすべて肖似近など云詞は、善に肖、善に似、善に近しと云ことなり、故に不肖とは、不肖善の意、おろ

かなることなり、肖とばかりあれば、肖善かしてきを云なり、

〔解義〕 天下の人打ち擧りて、我道はおろかなる者に似たりと云へり、それたゞ我道大なるが故に、素人眼にはおろかとみゆるなり、若かしこくみえて、素人のほむるほどの道ならば、久しき昔より瑣細の道にして、貴ぶに足らざるなり、

我有三寶。持而保之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲天下先。

〔解義〕 されば我道を語らん、そもく我に三寶あり、我持てこれを大せつに保てり、それこの三寶、人々誰もあるものなれども、猿智慧の爲に失ひ、私欲の爲に亡ぼして、あはれ人々持ち得ざるなり、それ我三寶は、一に慈と云、二に儉と云、三に敢て天下の先たらずと云、この三つなり、慈は物をあはれみいつくじむ

の心なり、儉は財用を費しへらさざるなり、不敢爲天下先とは、謙徳なり、我一番先に進むことをせざるなり、この三寶こそ、即我道なれ、

慈故能勇。儉故能廣。不敢爲天下先。故能成器長。

〔字訓〕 廣は廣大なり、乏しきことなきなり、大そうにすることなり、成器は萬物のことなり、こゝにては萬民をさして云、長は君長なり、上たるを云なり、

〔解義〕 されば試に三寶の驗の廣大なることを云はん、夫慈もていつくしみあはれむ、故に能く物に恐れぬ勇氣あり、雞の子を育つるときには、雌といへども人にも怒り向ふものない、これ其證なり、儉にして財用を費しへらさず、故に財用廣くして

乏しからず、さしつかへることなきなり、不敢爲天下先して、ひかへめなり、故に能く萬民その謙徳に歸服して、これに君長となりて、上に立つことを得るなり、かゝる廣大の驗あり、豈貴き寶にはあらずや、

今舍慈且勇。舍儉且廣。舍後且先。死矣。

〔字訓〕 後は不敢爲天下先の一句を、一字に縮めて云へるなり、意は同じことなり、

〔解義〕 あはれむべきは世人なり、かゝる貴き三寶の理を夢にも知らず、勇は慈より出づるものなるを、その本の慈をすて、始より勇ならんとし、廣は儉より出づるものなるを、その本の儉をすて、始より財用を廣大に用ゐんとし、人に先だつは不

敢爲天下先して、後となるより出づるものなるを、後たる道を
すて、始より人に先だゝんとす、かゝる無分別の者は、その身
命をはたさんのみ、いかんぞ全きことを得べけん、

夫慈以戰則勝。以守則固。天將救之。以慈衛之。

〔解義〕 こゝ三寶の内の一を擧げて、その餘の例とす、それ慈の
心なれば、上下一同、相互にいつくしみあはれみ、上は下を身に
かへて見放さず、下は上を命に換へて見捨てず、一和一心なり、
是を以て敵と戦へば、いかなる大敵にも勝つべし、是を以て國
を守れば、いかなる大軍にて押し寄するも、その守堅固にして
危きなし、天下大勇、何を以てか之に加へん、その上天よりもこ
れを救ひて、福を與へ玉ふは、これ慈の徳を以てその身を守れ

ばなり、

六十八章

〔章意〕 此章及び次の章、ともに謙の大用を明す、夫軍はも
と争ひのことなり、然るに其勝をとる所以は、争はずして
謙己にありと云は、誠に凡人の思ひはからざることなり、

善爲士者不武。

〔字訓〕 武はたけく手暴なることなり、

〔解義〕 それ善士と稱すべき者、その人たけく手あらに威勝な
らず、やはらぎたるものなり、

善戰者不怒。

〔解義〕 その戦の上手なる者は、性急なるもの、一旦の怒に忍び兼て、勝算なき軍する如きことなく、怒てかゝることはせざるなり。

善勝敵者不與。

〔字訓〕 與は相手とり決戦するを云なり。

〔解義〕 それ勝つことの上手なるものは、敵の相手となり、死を極めて決戦することなく、手がるく勝をとるなり、先儒義経を戦上手と云、この類なり。

善用人者爲之下。

〔解義〕 それ高ふれば惡み、謙れば悦ぶは、人情の常なり、されば

人の力を用ゐ、人を使ふことの上手なる人は、謙り玉ふなり、それ故に人悦び、死力を致し、戦へば勝ち、守れば固く、我欲する所の如くならざるなし。

是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天。古之極。

〔解義〕 それ是を人と争はずして、謙るの徳と云なり、又是を人の力を用ゐることを得ると云なり、又是をその量の廣大なる、天の無窮に並ぶべしと云なり、是れ古の至極の道にして、これに勝る徳あらじ、たゞみかけて賛歎するは、人をして能く心得しめんとするなり。

〔餘論〕 詩に云、柔嘉維則と、これ周室の名將仲山甫を稱せる詞にして、此章の旨と符合せり、想ふに知剛知柔、花も實もある大

將なるべし、惜哉我邦源義經の如きは、古今の名將と稱すれども、たゞ此變化の妙用に暗かりしこと、善用_人者爲_之下、後漢の馬援、公孫述と舊識なれば、遙々行て従はんとせしに、公孫述驕り高ぶる體ありければ、見かぎり去て、終に光武に從へり、我邦鎮守府將軍俵藤太も、初は相馬將門に從はんとして行きしが、將門の高ぶるやうを見て、厭ひにくみて従はず、終に將門を攻め滅ぼせり、これ皆みづから高ぶるものゝ、人の力を用ゐることを得ざるをみるべし、

六十九章

〔章意〕 此章言は兵の強弱勝敗は、將たる者の慈心にあり、慈心あれば勝ち、慈心なければ敗る、これいまだ兵を交へ

ずして可知なり、孟子曰、不嗜殺人者能一天下、その説全く同じ、

用_レ兵有_レ言。吾不敢爲_レ主、而爲_レ客。不敢進_レ寸、而退_レ尺。

〔字訓〕 主とは軍の發頭人となり、我より軍起すことなり、客はうけ方、相手方となることなり、進は争ふ意あるなり、退は争ふ意なきなり、

〔解義〕 それ兵は凶器、戰は危事、もとより人を殺すのことなり、慈心ある者の好む事にあらず、不得已のことなるのみ、發端、されば古の兵家言へることあり、我敢て軍の發頭人となりて亂を興すことをせずして、敵よりしかけ來れば、うけ方となりてこれを伐ち除_ルのみ、吾敢て進むことは一寸も進まずして、退

くことは一尺も退きて、もとより我に争ふ意なきことなり、

是謂行無行。攘無臂。扔無敵。執無兵。

〔字訓〕 行は行軍なり、軍を押し出すことなり、無行の行は行列なり、攘はうでまくりすることなり、扔は就なり、つきより相戦はんとすることなり、兵は武器なり、

〔解義〕 我より軍を興さず、敢て進むことを好まざるを、是を行列あれども、それをたのみにして押し行くことをせざれば、押し行くに行列なきも同様なり、臂あれども、それをたのみにして攘げあげ打てかゝらざれば、攘げるに臂なきも同様なり、敵あれども、それを目指して扔き寄てかゝらざれば、扔き寄るに敵なきも同様なり、武器あれども、それを持って戦はんとせざれば、執り持つに武器なきも同様なりと謂ふなり、されば我にあるを待みにせず、彼なる敵を輕んぜず、臨事而懼、好謀而成者也、

禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。

〔解義〕 夫敵を侮り輕んじて、かるくしく驕り進めば、疎忽多くして、必大敗をとるものなり、禍は敵を侮り輕んずるより大なるはなし、敵を侮り輕んずれば、我慈儉謙の三寶を失ひ、國家の存亡、萬人の死生にかゝる、其可不思哉、

故抗兵相加。哀者勝矣。

〔字訓〕 哀はあはれむ、慈愛なり、
〔解義〕 かゝるわけ故に兩軍推し出し相戦はんには、慈愛の心

ある者、必勝つことなり、そは慈愛の心ある者は、萬民の死傷をいとひ思ふて、必ず謹慎鄭重にて疎忽にせず、敢て主とならず、敢て進まず、それ上として下を思へば、下亦上を思ふなり、その心一致一和して、矢石のしげき雨霰の中と云へども、敵に後をみするものなく、各必死の士となるべし、一人必死の士となれば、十人に當り、十人は百人に當り、百人は千人に當り、千人は萬人に當り、兵威のつよき前に立つ者あるべからず、しかのみならず、慈愛の心ある者は、天地たすけ、神明まもる、必勝を得る所以なり、

七十章

〔章意〕 この章は、聖人和光の徳をのぶるなり、

吾言甚易知。甚易行。天下莫能知。莫能行。

〔解義〕 吾言は甚知り易く、甚行ひ易し、然るにさしも廣き天下に能く知る者なく、能く行ふ者なきは、いぶかしきことどもなり、

言有宗。事有君。夫唯無知。是以不我知。

〔字訓〕 宗君ともに主意と云が如し、

〔解義〕 そもく、吾言に主意あり、無爲にして自然なるべしと云、これ主意なり、吾なす事に主意あり、無爲にして自然なるは、これ主意なり、この主意だに心得なば、吾言を知るべく行ふことを得べきなり、夫唯この主義を知らず、それ故に吾言を知る者なく行ふ者なくして、我を知らざるなり、それ我を知らずと

て、名を聞かざるにもあらず、面オモテを知らざるにもあらず、我心我徳を知らざるを、我を知らずとは云へるなり、

知我者希。則我者貴。

〔解義〕 それ世の人の、埋木の花咲くことのありやなしやと、色をも香をも知るらん人をかち歎ナガくは、皆凡情のみ、發端、我を知らざるこそ、いと喜ぶべけれ、童子は大人の事を知らず、凡夫は聖人の上を知らず、これ境界のたがへるが故なり、されば我を知る者稀なるは、我凡夫を離れ、類を出て萃に拔んでたるが故なれば、我はいよく、貴きものなり、

是以聖人被褐懷玉。

〔字訓〕 褐は賤者の服なり、毛を織り入れたるものと云へり、被

褐は、外を飾らざるのたとへなり、懷玉は、内に徳あるに譬ふるなり、

〔解義〕 それこの故に聖人は、世に知られんことを求め玉はず、光を和げ塵に同じうし、その賢を顯さんとし玉はず、外に見にくき服を被て、内にうるはしき玉を懷き玉ふが如くなり、中庸に衣錦尚絅、其意同じ、これ皆古聖賢の小人の内虚にして外を飾り、人を欺き名を盗むことを戒め玉ふなり、

七十一章

〔章意〕 この章も、同じく和光の意なり、

知不知上。不知知病。

〔解義〕 道を知りながら、それを面に顯さずして、知らざるふり

なるものは、上^{スレ}たる人なり、道を知らずして、虚を飾り、知れるふりする者は、人の病なり、

夫唯病^{トス}病^ヲ。是以不病。

〔解義〕 それたゞ病を病と心得て、知りたるふりをせざるなり、こゝを以て病なき人となるべきなり、

聖人不病。以其病^{トスルヲ}。是以不病。

〔解義〕 そもく、聖人は病なきものなり、そは聖人は知りたるふりするの病を病と心得玉ひて、其ふりをなし玉ふことなし、是を以て病なきものなり、

七十一章

〔章意〕 人君は清静謙後を以て、國を治め玉ふべきことをのぶるなり、

民不畏^レ威。則大威至^ル。

〔字訓〕 大威は、天罰なり、

〔解義〕 それ國を治むるに、上たる人、欲を恣^{カシ}にし威に任せてなす時は、おのづから無理なる仕向け出来て、その威軽くなり、下たる者、上の威を畏れず、侵し慢るに至るなり、^{以上}それ下たる者、上の威を畏れず、侵し慢るに至りては、上下ともに亂れて、天罰至り、國家滅ぶるになんくとするなり、

無^レ狎^ニ其所居。無^レ厭^ニ其所生。夫唯不^レ厭。是以不^レ厭。

〔字訓〕 所居は、註に云清淨のことなり、清淨なるは、安泰なる居

りばなり、故にこれを所居と云、所生は、註に云謙後のことなり、謙後なれば、安全にして生きながらふることを得るなり、故にこれを所生と云なり、

〔解義〕 されば人君、國を治め玉ふに、よく心し玉ふべきことあり、そもく、清淨なるは、安泰なる所居なり、その所居を狎しく離れて、躁がしく欲を恣にし玉ふことなかるべきなり、又その謙後なるは、所生の道なり、その所生の道を厭ひ棄て、威權に任せて推しつけ爲し玉ふことなかるべきなり、それ唯この所生の道を厭ひ棄てず、威權に任せ推し付け玉ふことなし、是を以て下たる者、亦人君を厭ひ離る、心なくして、推し戴き仰ぎ貴び奉るなり、

是以聖人自知不自見、自愛不自貴、故去彼取此。

〔解義〕 是を以て聖人は自ら道を知れども、自らその賢を見し玉ふことなく、能く晦まして目立たぬやうになし玉ふなり、自ら其身を愛すれども、自ら貴き體をなし玉ふことなく、能く賤しうして高ぶり玉ふことなきなり、故に彼の慾を恣にし威に任ずるのしかたを捨て、此靜にして謙なるのしかたをとり玉ふ、これ國家太平長久なる所以なり、

七十三章

〔章意〕 この章、天命の畏るべく報應の昭然なることを云て、人々忽にすべからざることを示すなり、

勇於敢則殺、勇於不敢則活。

〔字訓〕 敢は推しつよきことなり、不敢は即堪忍のことなり、
 〔解義〕 凡そ人のする所利ならざれば害、害ならざれば利、利害の二端に出でず、これ慎むべきの所以なり、今夫人の事をなすに、暴虎馮河、敢て強暴なることに勇なれば、人の害世の妨げなること多くして、終に犬死をとぐるものなり、又臨事而懼、不敢して堪へ忍ぶことに勇なれば、時處の考へありて、宜きに適ひ身を保ち、活きながらふることを得るなり、問て曰、凡そ敢往敢爲など云氣概は、人のとり得にも見ゆることなるに、今かく云へるは、いかなることなりや、答て曰、すべて人の事をなすは、道理に循てすることにて、しかく氣をいらつには及ばざることなり、氣をいらちてする者、必理もなく法もなきしわざとなるなり、然れば其身殺さるゝに至ることあるべきなり、

此兩者或利或害。天之所惡。孰知其故。是以聖人猶難之。

〔解義〕 敢てするに勇なるものと、不敢に勇なるものと、此兩者一つは身を保つことを得て利あり、一つは犬死して害あり、そもく敢てするに勇なるものは、天の惡む所なり、さりながら天道幽遠にして、その惡み玉ふ所以を知るものなし、是を以て聖人の大徳すら、猶敢てするに勇なることはなし難きこととし玉ふなり、

天之道。不爭而善勝。不言而善應。不召而自來。繹然而善謀。

〔解義〕 それ天道は測るべからざるものなり、天の勝は、人の力を以て一旦の機を争ひて勝つが如きものに非ず、争はずして

善く勝つものなり、そは人の勢強くして、天の意も通りがたき
時には、争ふて強ひて通さんとし玉はず、人の勢に任せ置き玉
ひ、善人に禍あるもあり、惡人に福あるもあり、禍福吉凶、當を得
ざることもあれども、やがて人の勢衰ふる時に至りて、天の意
通りて、いよく善人には福あり、惡人には禍ありて、つひに天
の意の如くなり、譬へば山に火を放ち焼き立つるに、山の上に
多くの人ありて扇ぎ防ぎなば、火は燃えあがることならざれ
ども、扇ぎづめにもならざれば、人の力や、衰ふるときに至り
ては、火はもとの如く燃え上がることなり、これを不爭而善勝
と云なり、語曰。人衆勝天。天定勝人。と、このことなり、又天は人の
如く言を以て應ずるものにあらず、天は言ひ玉はざれども、善
に福、惡に禍、そのほどく、に應じて違ふことなきものなり、こ

れを不言而善應と云なり、語云。出乎爾者。反乎爾ものなり、又云。
貨悖而入者。亦悖而出と、このことなり、又天は人の召して始め
て來る如きものにあらず、我より召さざれども、近く如在其上
如在、其左右にして、人の善惡を照覽し玉ふこと明なり、これを
不召而自來と云なり、詩云。昊天曰昭。與汝出往。昊天曰明。與汝遊
衍と、このことなり、又天は人の迫切なる如きものにあらず、繹
然舒緩なるものなり、冬種まきたるもの夏實のり、春花さける
もの秋熟する如きにても、その様は知るべし、禍福の報應も、固
より速なるもあれども、その遅きは、一世二世數世の後なるも
ありて、舒緩にして迫切ならざるものなり、をこ、繹然然るにその
報應は、人の口をかりてのぶるもあり、自ら名のり云はしむる
もあり、人の手をかり亡ぼすもあり、自ら亡ばしむるもあり、そ

の種種々にして、巧なること、人の智慧思惟の及ぶ所にあらず、
をこく善謀これを縉然而善謀と云なり、

天網恢恢。疎而不失。

〔解義〕 天の網廣大にして網目疎く、善報惡報漏るゝものある
如くなれども、つひに一人の漏るゝものなく、善に必善報あり、
惡に必惡報ありて、疎なれども失ざるものなり、嗚呼勇於敢も
のゝ殺さるゝ、これ天の網にかゝれるなり、思はざるべけんや、

七十四章

〔章意〕 此章、邪惡なる者は、必これを除く人あり、我手を下
すに及ばず、只忍んで待つべしと云なり、

老子講義
十一頁十九行

民不畏死。奈何以死懼之。

〔解義〕 それ生を欲し死を惡むは、人情の常、況て父母妻子ある
身にあれば、誰かは死を畏れざるものあらん、然れどももし政
苛く民窮し、朝夕の烟たちかね、寒さを防ぐ便なく、世に頼みな
きものとなれば、死を畏れず、法を犯し令に背き、邪惡をなし、人
を殺し盜をするに至るなり、それかく民その死を畏れざるに
至りては、奈何ぞ死を以てこれを懼さん、死は固より覺悟なれ
ば、懼れざるべし、それ人の畏るゝは死なるが故に、上たる人は、
人を生殺するの權を執て、下を制御し玉ふことなるに、かゝる
人氣に至りなば、世は亂るべし、されば國を治むるは、仁政を行
ひ、下豊ならしめ、民の死を畏るゝ風儀とならしむべきことな

り、

若使_レ民常畏_レ死。而爲_レ奇者。吾得_レ執_レ而殺_レ之。孰敢_レ。

〔解義〕 もし仁政を行ひ、民豊かにして其生を聊んじ、常に死を畏れ身を慎む風儀とならしめ、もしその上に、法を犯し令にそむき、邪惡をなす者あれば、吾それを罪し執へて殺さば、誰か敢て邪惡をなす者あらん、邪惡をなす者なかるべし、

常有_二司_レ殺_レ者_一。殺_レ者_一殺_レ者_一。殺_レ者_一殺_レ者_一。是謂_レ代_二大匠_一。斲_レ夫代_二大匠_一斲_レ者。希_レ有_レ不傷_レ手_一矣。

〔字訓〕 司は頭取_{トクドリ}をすることなり、

〔解義〕 されども邪惡をなす者は、天下人々の疾むことなれば、

常に罪ある者を頭取_{トクドリ}て殺し除る人あり、吾さし出て手を下すには及ばざるなり、それ頭取_{トクドリ}て殺す人に代りて手を下すことは、是をものに譬ふれば、下手_{ヘタ}大工_{ダイク}が上手_{ウケツ}の大工_{ダイク}に代りて削るが如し、それ上手大工は、上手なれば手は切らず、下手大工の分として、その身の程を忘れ、上手に代りて削る者、必手を切ることなり、ゆめ／＼なすべきことにあらず、俳句に、夕立_{ユヅリ}や短氣な人はぬれて行く、この忍耐_{コラヘ}性のなきを云なり、

〔餘論〕 朱子嘗曰、古今老子の教を善く得たるものは、張良なりと、然れども張良も少年のころは、血氣の强者にや、老子の教は心得ず、張良は韓の相家なり、秦の始皇、韓を亡ぼせる故、その仇を報いんとして、博浪沙にてその行幸を狙ひて、鐵椎を以て摧碎せんとせしに、撃ち損じて副車に中りたるは、危き事と云べ

し、其後黄石公に兵書を授かりしころより、道を得たるにや、後に漢の高祖に従て、高祖の手をかり、秦を亡ぼして君の仇を報い、又其後楚の項羽、韓の子孫を亡ぼしたるに、これ亦高祖の手をかりて項羽を亡ぼして、再び君の仇を報い、つひに一度も己が手を下すことなし、これ誠にこの章の意を善く會得して、大匠に代りて削ることをせざるなるべし、

七十五章

〔章意〕 この章は、國を治むるに、淡泊無欲ならざれば、亂を生じ、身を持するに、淡泊無欲ならざれば、生を喪ひ、いづれもその害あることをのべ戒むるなり、

民之饑。以其上食稅之多。是以饑。

〔解義〕 それ食は民の手より出来るものにて、彼その本なれば、食に乏しくして饑ゆることは有るまじきことなり、然るに民の饑ゆるに至るは、其上たる人の年貢を多くとりて、民は我手にて作り得たるものは、みな上に奉りて乏しくなるが故に、是を以て饑ゆるに至るなり、以上本文むかしより、民より聚斂して、窮乏之餘、あつまりて群盜となれること多し、秦季の亂、明末の流賊等も是れなり、その終りみな天下を亡ぼすに至る、唐の太宗曰、民の物とするは、己が股を割て食ふが如し、一旦腹は充つれども、身亡ぶるなりと、みなこの理によることなり、

民之難治。以其上之有爲。是以難治。

〔字訓〕 有爲は、無爲なること能はずして、智慧にて治むること

なり、

〔解義〕 それ民は田畝を耕して力作を業とするのみにて、もとより無智なるものなり、然るにその民の邪智奸曲にして、治め難きに至ることは、其上たる人、有爲にして智術權譎を以て治むるにより、是を以て民亦狡猾コザカシクになりて、治め難きに至るなり、

民之輕死。以其求生之厚。是以輕死。

〔字訓〕 生は生養なり、

〔解義〕 すべて生とし生るもの、その命を惜まざるはなし、然るに民の輕々しく命を喪ふに至ることは、各その生養を求むることの厚くして、富貴榮耀を貪り、智を役ひ身を勞し、利を營み禍を忘るゝにより、是を以て輕々しくその命を喪ふに至るなり、

り、

夫唯無以生爲者。是賢於貴生。

〔解義〕 それ只其身の生養を、有るに任せて何ともすることなく、清淨無爲なるものは、其生養やすくして命を喪ふの憂なく、生養を貴び旨とする者よりは遙に賢れるなり、されば萬の利害、みな我によることなり、

七十六章

〔章意〕 この章、血氣の強を戒む、血氣の強は、所謂暴虎馮河の類にて、無分別なることなり、武勇とは似たることの似ぬことなり、能く思ひわけて混同すべからず、水戸義公の